古今類句　く

和書門　類
七八六五號
七九函
一架
三六冊

内閣文庫
和書　類
七八六五號
三六冊
二〇函
七架

内閣文庫
番號　和 7865
冊數　36（21）
函號　201　87

Kodak Gray Scale
© Kodak, 2007 TM: Kodak
colorchecker x-rite
国立公文書館
National Archives of Japan

玉葉旅　まとろましこよひならてはいつか見ん　くろとの浜の秋の夜の月　菅原孝標女

新後拾冬　あらしふくかたのゝをはなちりはてぬ　しろかたの山にあらはるゝ雪　従二位教政

山家集下　すゝしさはゆふひかくれてなきそめし　しろたへのまもなく風のふくをきく

同　竹のとを荻ふく風のすさふ夜は　くれゆくまゝにそてそつゆけき

後撰恋四　ひきまゆのかく二こもりせまほしみ　くはこきたれて鳴をみせはや　忠房朝臣

拾遺雑春上　いにしへの文開の花はなけれとも　ふかくもひかりをまつはなれけり

新古今神祇　動ちなきやまと嶋根の神かきは　ちよとこそいはへきりたつ　卜部兼直

新葉神祇　ゆふしてにちよをかけたるいまの社　ちよつやさはる人もあらし　後村上院御製

新後古今雑下　白川にうつりし人のかけみえて　ちよのみやこにあまる君かな　源兼氏朝臣

新拾遺　吹風よむかしのこゝろみるらん　ちよのこゝろにあひける花　土御門院御製

拾遺恋上　むかしこそちよひかりへてみよ　ちよまつへよる秋津嶋かな

同下　月よりも民の家も宿りとて　ちよさかゆく代々のさかへ

山家集下　ちりゝたのまつやしなひよるさきは　ちよまてなにもそのまゝ

新後拾雑春　さくらさくの雲風そその郭公　くやしきよひとやなにけん　後三条入道太政大臣

詞花冬　おく山のいはかき紅葉ちりつもる　ちらぬをやかてこのはの霜そつもる　大納言匡房

拾玉集五　七そちにまつはるかにきけは　ちよの風おもひもあらぬよそ　祢宜成定

後拾遺雑四　うれしさをけふはなにゝつゝみけん　うちはへてまことみにしむ袂を　藤原孝善

後撰恋一　我恋は深山かくれのむもれ水　うちそへてぬるよも人をまちわびぬ　贈太政大臣

拾遺恋草下　なみだせく袖のみなとはさわげども　うちそへてぬるまもなくて[illegible]　小野小町

続古秋旅　行人も我世もさだめなきものを　うちたえて何はの[illegible]ぞ　後嵯峨院御製

風雅冬　霜さえて今日の[illegible]　うちかへしさもそみえぬる　[illegible]

拾遺恋草中　あさぢ[illegible]人知れぬ世の根もさ　うちかへし袖のかはく日ぞなき　[illegible]

久安　あはれ[illegible]　うちかへし袖のなみだはいくよ　[illegible]

拾遺恋草下　つれなくて今もあさ世の[illegible]　うちかへし[illegible]　後京極摂政

新後拾秋下　君のみやありすもとめ[illegible]　うちかへし[illegible]　後醍醐院御製

新千恋二　ふりやむといふも[illegible]月[illegible]　うちかへし人の[illegible]　権大納言隆房

新後恋一　人しれぬ[illegible]　うちかへしかくて神まちやせん　藤原為忠

玉葉雑一　あはれとも今はと[illegible]　うちぬるが[illegible]の[illegible]　寂蓮法師

月清集上　渡かゝる[illegible]　うちぬる[illegible]

同下　[illegible]世やちよを[illegible]　うちかへしも君が[illegible]

新古恋二　ありとてもあはれなる[illegible]　うちこえて[illegible]の埋木

拾遺恋草下　いつのまにゝやすらぬ[illegible]　うちねぬるひとりあさ[illegible]

続千恋四　[illegible]あはれ月[illegible]　うちたえて[illegible]　権大納言良教

千載恋傷　かゝるよをあすは[illegible]　うちもなき[illegible]　藤原兼経朝臣

山家集上　うちむれてたのむほとけの[illegible]　うちあかしに[illegible]

玉葉恋一　つらかりし[illegible]の袖の[illegible]　うちなびきてぞ衣の[illegible]　源家長朝臣

新拾恋一　せきかぬる[illegible]　うちなびきて[illegible]　権中納言公雄

後拾恋四　涙のいろをみよと[illegible]　うちなびきて[illegible]　民部卿資宣女

続古雑下　いさり火の[illegible]名残[illegible]　うちなびくことは[illegible]　後土御門内大臣

拾玉集一　いつまでか[illegible]女郎花　うちかはし[illegible]

玉葉雑四　[illegible]　うちのこる[illegible]　前大納言公経

千載恋一　おもひあまり[illegible]　うちやすみ[illegible]　左京大夫顕輔

新古夏　小山田に[illegible]　うちそへて[illegible]　摂政太政大臣

続後撰雑中　たてそめし[illegible]　うちそへて[illegible]　常盤井入道太政大臣

続後拾雑中　いつまでか[illegible]　うちさそふ[illegible]　従二位成実

新勅雑四　夏ひさそ[illegible]　うちさそふ[illegible]白雲　鎌倉右大臣

新勅雑四　我もさぞ[illegible]　うちさそふ[illegible]谷の埋木　藤原頼綱

金葉恋上　年ふれど人もすさめぬ我恋や　うちさえて[illegible]谷の埋木　条院雑種

新後拾秋上　[illegible]秋の[illegible]　うちさそふ[illegible]　法印浄弁

古今雑下　[illegible]　うちしとく[illegible]　きのとものり

続古賀　よろづ世の秋をかぎらぬ[illegible]　うちしくる[illegible]山の[illegible]月　左近中将公雄

新千恋二　[illegible]　うちも[illegible]　よみ人しらず

新拾神祇　なかめつゝ二たひ年月をかそへみれは　くちせぬちきりいくたのまん　日吉法師
続千雑中　法の水くみてつかへし跡なれや　くちせぬ名こそ今も残りて　順空上人
浮舟　たえまのみ世にはあやうき宇治橋を　くちせぬ物となほたのめとや
玉葉雑二　さもあらはあれ名のみのこりて宇治の橋　くちすはいまた人もみえけり　前中納言定家
新後恋一　神の浦の浅入江のみをつくし　くちぬるまてやよそにこひなん　祝部成茂
風雅恋四　うき身をはすてゝもあらすなからへて　くちかひなくてはてそこひしき　後嵯峨院宮内卿
続後撰恋中　いはせぬる年ふる里の松もなれん　くちはてゝ袖の涙のかゝるね　藤原雅成
新千恋四　さそなけにきく人の袖やかはくまなき　くちはつる袖も神やしるらん　権僧正源守
続後撰恋三　いかにせん人のまことを思ひしれ　くちはてはすれとよるけぬ君か　従二位行能
新後拾恋三　恋のからもこひしきといひて人の　くちもなきそへ衣のうへ　花園院御製
続拾遺秋上　山やまゝて今宵そ月の光(?)にも　くちとさきにたつる雲かな　大江資郷
新古冬　年のうちに浮世のことをさむしつゝ　くちもなくてとけてはほとけ　前大僧正慈鎮
後撰恋下　花しあれはそのえはえなくかなしん　くちもけのなかれてはほと　よみ人しらす
山家集上　氷上に水やよわむすほれん　くちとむるぬ川の岩かね
玉葉旅　難波かたうつ舟人の波よせて　くちもみなと風まちえたり　壬生忠見
風雅雑中　飛つゝそさそりふる稲羽に　くちいろをいつまて出すらむ　藤原為基朝臣
続千雑神　花の色はみなつゆとちる　くちかものゝあはれはたのまし　曽祢好忠
長秋詠藻上　さりともとおもひし程に年をへて　くちてはてぬとおもひけるかな

玉葉冬　氷ゐる月もさやかにてらしてそ　くもりなき世のひかりならまし　正三位経朝
風雅雑上　日数経る雛のすみかの竹そよく　くもとそ見えしつらき（に）　参議公成卿
続千雑上　みかくるは鏡のかけもさし出て　くもりなきをそ何かおもはん　津守国冬
新勅恋四　あまの戸を開くるまことそそむけれ　くもとなりてそ我をもしらん　よみ人しらす
新拾羇旅　たのみてし宿りかす里は旅の空　くもとみえ行けつゝそ来ぬ　同
新葉羇旅　こゝろにもあらぬ身をせくちの　くもとみそれ行て秋のそら　前中納言惟継
新続古今雑春　里の名のつゐにかはらぬ花の色に　くもとかすみやなをさそふらん　後京極
同夜　早苗とるあまた田面も山の井に　くもりかはりて里人　前大納言為定
続千秋下　夜もすからみかの原の松の音に　くもらすたのむ月の光なり　昭訓門院春日
新勅物名　あかすして八重山吹の露の花　くもりなくさしてくもらす　二条太皇太后宮大弐
新拾秋上　花やその神よりなみたの露　くもりよそに雁のまへの夕暮　亀山院御製
壬生二百中　さむしろに月もあはれに哀ふかき　くもりて梢を吹風の
新千夜　ちりのこる月の山のはを出つる　くもりよもに雁やをり（?）　津守国助
続後拾雑上　よるしらむ光の後の夜半の月　くもりよてその神代月影　津守棟国
同秋下　こよひそと見るくさみのかけの秋の月　くもりよてて光のうちみれ　前大納言為氏
山家集上　月のそてさしいりぬる峯の浦に　くもりなき秋の山をこえ
玉葉秋上　秋ふかき夜は月影も寒からぬ　くもりはてぬ秋の夜の風　前大僧正慈鎮
拾玉集六　さえ氷しきつゝ春ともなりぬらん　くもまなきにいはまいてつゝ

新拾秋上　いかにして恋しき袖を七夕乃　みなれ衣をかしてかへらん　後照念院関白太政大臣

拾遺恋二　蘆根はふうきは上こそつれなけれ　みるまにしたはふかきなりけり　よみ人しらず

新拾恋三　蘆とそもなるとうらみしもまたこえん　みるまゝにもまたなるゝかな　同

後古羇旅　すむ人もなき草のやどゝ雲井のむかしに　みるにはしたふさしもなき　権中納言定家

後拾雑下　そむく世は世にいづれにかえつらん　みるにはしたふあかしをも　西蓮法師

新後拾恋四　かりそめに今はとわかれていくたびか　みるもつらくなからまし　前関白太政大臣

壬生二下　いつはせんかたの浦の名にはあれど　みる物はたゞこゝのみん

拾遺夏上　ちる花のつれなくみえしあかつきを　みるもおしくうすむしの

拾遺貞外上　みなそこにひかれてかへる夜半の　みるもおきふしぞみゆる

玉葉秋上　里とほき那須の杜の下すまり　みるもまぬ松風のおと　衣笠前内大臣

新拾秋上　かけてきぬ雉のはしをきり　みるも浦ぞあさへ鳴らん　法印實性

後古春下　かぞへても秋の花のいろそへ来ぬ日は　みるもあかぬ山ざくら　太宰権帥為経

拾遺夏下　たきつ瀬の浪の白玉とめて　みるゝりこゝろのはなし人　権少僧都経

新後拾秋上　雲もなき夜のそらに月のいでぬ　みるもその袖にむかれ　前関白

新勅恋三　わかれよりあまの塩山のさはへ　みるもたへぬまゝかへ　土御門院

後拾雑一　心から露にぬれてあかつきの　みるもとりとぬかしかな　延喜御製

玉葉恋四　秋風も吹かずふりそめ今もてき　みるゝりの袖のうへにぞ　同

新拾秋下　秋の世もくれちはつる今よりき　みる月のなかぞしなき

新拾恋四　はかなくもやまのかげの浦つたひ　みるよなくよな人ぞ恋しき　従二位行家

同恋三　うきもなきまで我もこそあらそひて　みるゝ人の心をもまた忘れて　如宗法師

新後拾恋五　かくれなき縁の初とも葛のうら　みるゝをかけてかけはしなん　平貞秀

新後恋三　またぬまにかはりてやすむ秋のまに　みるよもおもひすみけるかな　前太政大臣基

新後拾恋一　恋しさにいとゞ思ひの海の波つゝ　みるよもあかぬの袖ぬれし　権律師頼瑜

後後拾冬　池水の汀のうねをさえかへる　みるよもあかぬとねぬる鴨の　民部卿為藤

新続古恋　駒の足もとまりつゝ　みるよもすゑのなかと聞かん　前右兵衛督為盛

新後拾恋四　今はとて袖ぬらしたる池の名の縄　みるよもすゑの人まよふ　前大納言為家

玉葉秋上　きりぎりす枕のあたりかゝるなの　みるひとよはよなく　重之女

続千恋二　いせの海のあまのなかに入りて　みるれはとりの浦のかた　皇太后宮大夫俊成

後拾遺恋三　わか恋はあまのとまやの月のやどり　みるれは出る影のさみる　一条天皇

山家集下　まちすぐる頃まで暮てあふ　みるれは梅の大原の里

拾遺恋二　露分のよきよの草の下　みるれはあきの雲の夜

金葉恋　雲よりも海のむこうの頃の　みるれは六月のかげもあるかな　侍従

行親物語　わが袖は草の庵のまはりつゝ　みるれはつゆのかけぞなき

新勅雑二　我袖は草の庵のよはれぬとも　みるれはつゆも涙やあらなり　業平朝臣

後後撰恋下　今はたゞ花のゆくへもあき風の　みるれはたゞこはまの白波は　前大納言為家

拾遺恋上　朝夕にわかれゆく雲のまよ　みるれもむくつちてすゞし夢

山家集上　花とこそそのこゝろをしらすまされ　くるれはまた風をとも吹かゝり
月清集下　露ふかしとやかゝりけん涼しき　くるれは庭のもみちかなり
新後撰秋下　たゝ秋のつきもみつきかくも　くるれはのへの嵐よふくらん　前大納言為氏
玉葉秋上　いつくより吹くとも見えぬ白雲の　くるれは月へよみゆらん　前大納言為世
新拾遺冬　風さむみ浅茅か庭の夕日影　くるれはやかてむすふ霜かな　前大納言実教
後拾遺　郭公なく一声をちまちゝに　くるれはあくるよそのかたの月　醍醐入道前太政大臣
新後撰雑上　あすか風もむ里の夕くれや見えまし　くるれはこゝろにかゝるとのゝけ　今上御製
壬生二百上　天の原空行月やおもりけん　くるれはむすふ夕かれの花
拾遺愚草上　冬きては野への浅茅のかれかれに　くるれは雲かきやまのむしのなくらん
続古今秋上　あさなさな秋の風ふく山のはの　くるれはひとつ袖のしもそかん　土御門院小宰相
新拾遺秋下　昔日野の朝のゆふくれの　くるれは月はさかのよの月　従二位家隆
後拾遺秋上　七夕はあまの河原の手すさひに　くるつきてかたらぬ夜そなき　橘元任
玉葉雑上　我宿の柳の糸はみたるとも　くるくもひとつのうき思ひかな　左近大将経嗣
壬生二百中　たのむかたの野をかよふ袖の　くる山の嵐のさむしに
新後拾遺秋上　七夕にまちつる糸のいくかへり　くるとあくとぬれて合の袖　源師光
後撰秋下　ゆふ月もかゝるこゝろに猿なくや　くるあきことにふりまさるらん
詞花秋　おきまよふ霜とふるへも秋のそら　くるあきことにこほりとこそ　敦輔王
古今秋上　なに人かきてぬきかけし藤はかま　くるあきことに野へをにほはす　としゆきの朝臣

壬生二百上　初瀬山ひとつのかたの夕かけに　くる秋ことに秋風そ吹
拾玉集六　浮世をかへむとはかりて住すまと　くるしと云へはいとひやの空
新後撰恋二　かくしてもおもひにたえて縄すきて　くるしともえこそいはね　後嵯峨院御製
後拾遺恋一　まつりこの水まくらにかへしそ　くるしさも知らぬ　前大納言為家
古今恋一　いせの海のあまのつりなはうちはへて　くるしとのみや思ひわたらん　よみ人しらす
千載恋五　あはれさのかきりをそ知る人もなし　くるしかりけるものはかなしき　殷富門院大輔
長秋詠藻下　何ゆゑんか人を恋ひつゝ山のはに　くるゝ人まつたかき山のはに
風雅雑下　今日もまた神のかりそめの山　くるゝ人まつ竹の侘しさ　民部卿為定
新葉雑下　あはれわかもの代々の光をそへて山　くるかへきかきは見えさりき　右内大臣
玉葉雑五　つらきにはやすき我身をさそひて　くるなたすきなりけれはこそ人　院御製
拾玉集四　君も知るかなしきよそに見てやさむ　くるしみの身のかなしさ
拾遺愚草上　山かつのましはのけふりたつ見えは　くるゝ住よしの松の色
後拾遺恋四　わかこひはみやまかくれの池のほとり　くるゝてのうへにそあるらん　小辨
新古雑下　河上に立ちのほりけむ浪の上に　くるゝそのまゝの世にけるかな　刑部卿範兼
拾玉集一　世の中はひととまることはなき　くるくるとわかきの山路かな
続後撰恋二　我恋はうきよの人のしらぬ海の　くるやのもとにみつらん　俊恵法師
後拾恋三　うたゝねのゆめのたよりのかよひちも　くるやうまつかたにかはりぬる　津守国冬
新古恋一　かやり火のけふりをしのふ山かけの　くるやりはかはるかせのたえ　曽祢好忠

新續古今二　むすびおくちぎりそつくす吉田かれ　ふかきやまのみぞれ初めん　正三位隆教
續後撰六　夜山のこのはにのみふきたつら　ふかきやまの世秋かはらなよ　後鳥羽院御製
續古今五　秋風はさびしくさ山のちるもみぢ　ふかきやまかげなかはなく　後鳥羽院下野
續後撰二　ときはなる世川のひくむ霞の下みえん　ふかきやまにみかくれての　後京極摂政前太政大臣
新千釋一　早き瀬の岩かの浪風秋ぞ　ふかきやま下もさひしく　永陽門院少将
續拾遺釋一　いつまでかあらぬよわたりつゝまた　ふかきやまの入風なきの　もとのみつ
新後拾三　花をも法の中に草の葛もて　ふかきやまのおくにすみ　普光園入道前関白
新古今二　春しらぬここらのはなのつかはした　ふかきやまひとり住む　近衛院御製
續後撰二　いつもよのまよひ漢中にたちいで　ふかきまよひを知るの　前大納言基良
新千雑中　あさひのかげ浅沢江のみぞれるに　ふかき世のなかをたのむ　よみ人しらず
新葉雑中　山人のところに松木のそくなり　ふかき世中もひとへにのみ　中務卿宗良親王
新後拾雑下　昔よりなかくてかはるやも　ふかき世もはなのちる　前参議院仲
同雑上　なさけ人八千経の法にかつみの　ふかき世をも捨て法の　橘為村
續拾遺六二　人々のこころにまさる山の上にて　ふかきそれをもえなき　宣陽門院中納言
新拾釋一　神よりの風の声しらずすゝく　ふかきなつにむせぶ　平常顕
續後拾三　のりのえにむかやせの声あやなる縄　ふかきなさけにむくひをも　法印祐隆
新千釋教　今つまる誓の海の内よりも　ふかきちかひも入へきつ世　前大納言為家
續千釋教　あかつきの法の浮木せとえよかの　ふかき契さへ行つ流れん　刑部卿頼輔

新千釋教　いつまでか法の御船もまたぬ身は　ふかきちかひの舟やもとめん　前大納言教良
月清集中　峰はいつも風のおとのみなりけり　ふかき海も議しく　丹波経長朝臣
玉葉釋教　世にこえてちかひのふかきはなれかは　ふかきうみにしづむ身を
拾玉集一　法の人は法の船のたよりせは　ふかき海も渡るもかや
新葉釋教　何まよふ法のちかひに聞こゆる　ふかきちかひもかはらさらん　妙光寺内大臣
金葉雑下　おもふ沸ともたのむ教もさらにや　ふかきちかひも清くなるらん　源俊頼朝臣
月清集上　浪まくしおのみち風まてゆきの　ふかき海にそこ見えぬ行かな
拾玉集七　思ふのりのまことのむかしへかへり　ふかき海にはかなる人
同六　いける日の渡世の流れもよろし　ふかき海にしつみてもなほ
同四　ひくしたるかたのみかは　ふかき海の底の風やさき
續後拾三　あさからにだのめをかけつる夕露　ふかきちかひはてもなし　右兵衛督為定
續後撰一　つまもなき人の心のかはらぬかな　ふかきちかひの光をも　権大納言実家
新勅撰一　おもひてもあるかな拝みもたく　ふかきまでも我くみ　大宰権帥経信
玉葉釋一　思ひよるもみえてとけさかな　ふかきこそは絶えまとりける　権中納言公季
續撰六　川のかはらのさとかまくなせ　ふかきぞも我まことある　よみ人しらず
續千釋二　さてもかのこころの気まかちかひて　ふかきこえひとつも海かた　院御製
新千雑中　いとしく老の後そたつの山　ふかきみちのかりねに　前大納言為定
山家集下　まことにとふ道する君かりぬらん　ふかきまでもなにしかて

拾遺恋二　あまきてとおもひしれのなけきぬる哉　ゆくすゑの世にもかはらぬおもひなれ　よみ人しらず
後拾遺恋三　岩ねふみかさなる山の奥よりも　ゆくすゑの恋しきはなけかる　藤原清輔朝臣
拾遺恋一　逢ふ事をまつにて月日のすきゆけは　ゆくすゑとほき恋もするかな　よみ人しらず
同別　わかれての後はいかにとおもふらむ　ゆくすゑのとほきてもまたん　同
古今恋一　人の身もならはしものをあはすして　ゆくすゑ掛てよるまかせん　同
風雅旅　命あれはこの秋かせにたのまれん　ゆくすゑの世をたのむ身のうさ　前大納言為家
新後拾遺冬　ひとりのみなかくる水のこほるらん　ゆくすゑとほく風のふくなり　禅空上人
後拾遺恋三　待わひてつらきをくくは　ゆくへもしらぬわかこゝろかな　源有…
後拾遺雑四　いつのまにわかれのこゝろちは　ゆくひとしれぬわかれともかな　源重之
拾遺貞外下　あすかゝはふちにもなりて　ゆくへのわかれをいかにしらん
新古雑上　またみぬ月のそらのゆく　ゆくひともあはれの宿のあはれも　従二位家隆
新後拾雑上　山里は住へきそらのゆくへかな　ゆく人もことにそむかせ　元可法師
拾遺雑恋　池水のこゝろにかけてなかれゆく　ゆくひとをいかにしつらん　明日香采女
新後拾恋　あまのかはとかくわたりて　ゆくもかへるもしらぬ　源頼資
続古春上　みかのはらわきてなかるゝいつみ川　ゆくもとゝまる秋のいろかな　権中納言長方
長秋詠藻上　氷のうへにかよふらん　ゆくすゑもいかにとしらん
拾遺愚草下　かきくらすそらのけしきに　ゆくへもしらぬ秋の夕暮
続千雑中　ともにこそ世をのかれぬる河の浪　ゆくりもなくもなけかれにけり　源貞頼

新古神祇　冬の夜のあけの光に雪ふりて　ゆふしてかけし我もなき　紀淑望
山家集下　もかれゆくあらしの浪のさゝら波　ゆふひもさすもあはれなり
新後拾冬　枯はてゝ霜の下なる荻の葉も　ゆふしくれのみあつまりけれ　常磐
新千恋一　いつまでかまちわたりなむ人の　ゆふくれことにあはれなり　よみ人しらず
続後撰冬　天河あかすもなきそらにのこる　ゆふけてちかくおもひたる　後京極摂政太政大臣
続古冬　行かへりけふもあかすの霜の上に　ゆふけくかはらすきはなれ　式子内親王
壬生二集下　白露のおくにもたへぬ夕くれに　ゆふけてそゆくあはれのかりは
続後撰恋四　志ゝもあはれとぬれて袂の夕にも　ゆふけておもふ袖のなみたに　前中納言定家
新後拾夏　夕立の雲ふきはらふ池の蓮葉に　ゆふけてまろき露の色も　光厳院御製
続拾秋上　荻の葉に夜はあらしのおとすなり　ゆふしてのほる秋のつき　皇太后宮大夫俊成
詞花恋上　風ふけはおきつしらなみたつた山　ゆふけてもあはれとおもふ　源重之
壬生二集上　いせの海の塩せにかゝる　ゆふけて袖にあきもの
新後拾雑上　しかのうらや波のうへに　ゆふけても山おろしのからん　従三位為継
月清集上　大井川あさせの梅は　ゆふ波の色ものさゆら
新後拾雑春　大井河ゐせきのうへに　ゆふひつる花の月かけ　民部卿為有
玉葉夏　五月雨のふるきにおもふ大井河　ゆふつゝ霧のあめのけ　権中納言公雄
新葉雑下　河浪のうちよせてやる秋の　ゆふつゝもやまをかへりぬ　紀輔文
拾遺貞外上　ひとつも神のそなへ　ゆふす許のものおもひ

新古秋下　あけぼのや川瀬の波のたかせ舟　くだすか人の袖の秋霜　右衛門督通光
月清集下　久かたの天の川よりくだるらし　くたすうき木も年をへにけり
玉葉夜　大井河うかぶ筏のしるしとて　くだれば岩にさはる白波　亀山院御製
新勅雑二　なにとなく住まばや松の山かげに　くたりはてたる身をかくしつつ　後京極
新後拾冬　行と帰るまた世の人よしなき名をそ　くれゆく年は惜しむべきかは　権中納言公雄
玉葉雑二　世の中は山にうき身もかくれぬを　くれてもさぞと人の影見ず　民部卿為世
壬生二条上　ゆふぐれて秋も別もたれしけん　くれはてる山の紅葉のいろ　
後拾遺三　よるのまにまつ我はやく人をも　くれ行くべくは待つこそ見め　源重之
玉葉秋上　萩の葉に風のすずしき秋来れば　くれよりさきに鹿ぞ鳴くなる　藤原元真
拾玉集二　かきくもる空の雲ゐに今日も暮れ　くれぬる年やまた春の里
新後拾遺秋　あはれなるかなしき秋をたれに見ん　くれゆく山の紅葉ちるらん　紀盛家
新後撰羇旅　雲ふかき山の下道たどりゆく　くれぬとて宿かる野べの旅人　法印守誉
新古雑中　いかにせん君が山路のかけはしを　くれぬとひとりゆくべきかは　道命法師
拾遺愚草中　思ひしるうきことのみの年ふれば　くれぬる若葉むすぶ庵は
拾遺愚草員外上　やまとうたありてこそ人の世の　くれぬる山路見えてこそあれ
千載冬　一夜にも霜おく袖をしらずして　くれぬるたびをおもふ夕暮　前律師俊宗
拾遺愚草上　年ふれば雪にもまさる年の暮　くれぬるけふぞおしむ今宵
玉葉冬　かきくもりつれなく残る年の暮　くれぬるくるるに雪や成りなん　後徳大寺左大臣

新古恋三　見しも又あはぬ月日をへだてつつ　くれまつほどの空なかりけり　藤原知家
新後撰別　思ひ出よ誰がためにかは隔つとも　くれをまつとてかへるさの　前参議教長
新古恋三　床の上にあかつき方の夕暮や　くれをまつほどの袖ぞ露けき　藤原道経
壬生二条上　秋のよの涙のあはれ残りけり　くれにしもなほ我ぞ悲しき
続後撰夏　山のはの山田の苗を取りつつ　くれかかるまでなほ苗とらむ　前内大臣
続後撰冬　おしなべて雪ふりにけり夕暮の　くれなばまたも家路たづねむ　藤原兼安
新後拾遺三　忘れてもなほ身にそへる恋の涙　くれぬとも人にあふとさへや　院御製
続千載下　袖の上にあまりて香る梅の花　くれぬるはなほ見ぬ花の色ぞまされ　西園寺入道前太政大臣
壬生二条上　まちわびの霞に残る花の香に　くれぬればとひとり見る夜も
拾遺愚草上　あさみどりいとどしげれる月影に　くれぬるは春の花にそふ庭
古今春下　いざけふは春の山べにまじりなん　くれなばなげの花のかげかは　そせい
続千載哀傷　なき人のかげの面影に今ぞ見る　くれぬるまでのきさらぎの空　藤原宗秀
壬生二条中　山のはも時雨は晴れて月白し　くれぬる井手の山吹の花
同上　我が田山さくら咲きけり雲絶えて　くれぬる井手の風にちるらし
新千載上　雪とのみ見えつる花も梅の花　くれぬる井手の里の春風　清原元輔
続拾遺下　岩つつじありとてをりにふる雨の　くれぬる井手の夕暮の風　和泉式部
新後拾春上　春かぜのにほひの雪に吹きまじり　くれぬる梅の初花　太政大臣
新後拾冬　木の葉のこるかたしく此の山川は　くれぬる冬の夜のかげかな　権中納言雅世

新千冬　神無月三室の山の山おろしに　くれなゐくゝる立田河浪　式子内親王
壬生二集中　立田山神代も秋の木の葉より　くれなゐくゝる月やすむらん
新葉秋下　紅葉ちる山の嵐にうちはらふ花　くれなゐくゝる浪ぞたちける　権大納言公蔭
新拾秋下　露ふかき河のさくら紅葉の　くれなゐくゝる天の川波　前中納言定家
後拾秋下　紅葉ちる山の嵐の行衛にて　くれなゐくゝる秋の山人　順徳院御製
月清集下　嵐の池にみぎはの桜の紅葉　くれなゐくゝる汀の浪かな
後拾冬　大井川ゐせきに秋のとどめてや　くれなゐくゝる岩波　太上天皇
古今秋下　紅葉ばのながれてとまるみなとには　くれなゐふかき波やたつらん　素性法師
新千秋下　霜のたて露のぬきてもみえぬ外　くれなゐふかき山の錦ぞ　権大納言忠季
後拾秋下　山姫の色の染やうかはるらん　くれなゐふかき秋の柱　後法成寺入道前太政大臣
山家集上　山さとに家ゐせずばみましやは　くれなゐふかき秋の梢を　後京極摂政前太政大臣
山家集上　立田姫染し梢のちるをりは　くれなゐあらふ山川の水
後拾秋下　立田川ちるもみぢ葉を見て　くれなゐ井一面の世の白波
玉葉冬　かくもろともに紅葉に　くれなゐそめき見え錦のさき　前大僧都覚雅
新後古恋四　思ふあまりその色に出る秋や　くれなゐの涙の命なりけり　花山院御製
新古恋三　あさ淵をけまつの雲もはれて　くれなゐの袖よりぞみえける
拾玉集一　ちるとみゆるはなの錦を　くれなゐの色に染まぬしもしる人　
後拾雑上　思ひやることまでも若し織女の　くれなゐのあかぬかげの雲間に　平時直女

後拾恋三　つれなさにかつて恋しのしたにてもまし　くれなゐの涙ぞ袖にかくれぬべし　待賢門院堀河
玉葉恋二　白露も時雨もいたくもる山は　くれなゐのいろにそめざりけり　前大僧正慈鎮
新後恋三　在明の月にのこれる袂をも　くれなゐふかく染めてみる哉　藤原為忠朝臣
後拾雑秋　行末の宿をたのみて立出ん　くれてゆくけふの空の旅人　源経信
新後拾雑春　日もくれて行さきいそぐ山路にも　くれてやすらふ花のかげ哉　西行法師大僧
後拾遺恋四　春雨のふる中にさく宿の梅　くれてこそかをるなりけれ　源俊頼朝臣
新葉雑上　時あるとまつにかはる宿の花　くれゆくはるのとまりなりけれ　大納言為世卿
壬生二集上　行春にうつろふ花のさくら　くれゆくはるの色ぞ恋しき　祥子内親王
後拾雑下　いつも見し月日をたてゝ秋くれ　くれゆく秋の跡を見るかな
後撰恋四　なくさめて見ずや友まつほどもなく　くれゆく空の日をまちわびつ　みちのく
拾遺恋二　けふくるゝ昨日もさらにかはらねば　くれゆくやどの月をながめて　従二位成実
玉葉冬　うつろふも霜のまへにあはれ　くれゆく年のなごりなりけり　よみ人しらず
新古冬　花もなく恋つもる雪をつかはし　くれゆく年のなごりなりけり　前右大臣
後拾冬　かりそめに我ぞしらぬ雪の袖と　くれゆく道のはてぞかなしき　上西門院兵衛
新後古雑上　いつはりの空をもしらぬ雪　くれゆくとしの空ぞかなしき　平宜時朝臣
壬生二集上　ゆくへなくもみぢ葉のちる秋の宿　くれゆくとしの心ぼそさよ　大納言経信
拾玉集一　入日さす雲にくれゆくゆふべには　くれゆくとしのゝ情ぞなき

続後拾恋三　そてのうらかみかり枝よひく枝の　くれゆくうしの思はき哉　基俊

続拾秋上　姨捨山乃中秋のくもらぬ月　くれゆくうせふ鶴なく也　従二位家隆

詞花秋　たなはたにかさまくと思ひしを　くれはてぬれはかへりけり　左京顕輔卿

拾遺恋二　わかきみはたゝわれのみをたのむ　くれゆくそらのかはは　よみ人しらず

拾玉集一　独りのそらにたれはまた年月の　くれゆくまゝにゆく月の影そ

拾遺哀上　まてしはしまたきぬ雲を桜花　くれはてぬとも見るへかりせん　京極入道前関白太政大臣

続千哀　人ことにそれとたのめしはかなさの　くれゆくそらにいかはかりのいそき　院冷泉

風雅恋二　まち何かはたのまんむすむをり　くれはてぬとや人もいふらむ　今上御製

壬生二春上　たのまれしやまおりの雨の　くれゆくそらのうきさくらかな　大江千里

新後秋下　きりくらさまてもみぬ花の西の　くれゆく山のさきの世くら

新続古雑中　あまのつりたえてもみつの　くれゆくさとのみゆるしもの

拾玉集六　おもひねの月のやうにしつむ　くれゆく山のまつかぜ

同七　年乃をはりにさむしへの冬の　くれはてぬとやいはむ

後撰哀傷　なき人のよにあるかたをさそふ　くれゆくもまたいつかのあはれ　兼輔朝臣

新拾哀傷　世中はうき秋をまたくもりしを　くれゆくを心情くやあはれ　桜家住吉通

同秋下　よりつねの空のうつろふ時　くれゆく秋のをしみかね　中納言定頼

後拾遺秋下　あすよりはいかにせむ秋の　くれゆく秋をかすかにもおしむ　前参議雅経

拾遺恋五　いつもの山ものみけりさも　くれゆく秋をきかまほしき

新勅羇旅　ゆきくれのはなのかけにて宿かりも　くれゆくおきつ浪のうへにいとはん　権大納言長家

玉葉恋三　さくらのことをまつむすびつゝもしへ　くれしとまておもひけるかな　右大臣

千載恋下　人めのみしけきやまのさとの　くれなゐはなをかぎりにも　久我内大臣

壬生二春上　かへるさのやどりの花にさきにけり　くらふの山をこえはてて

玉葉雑一　いさしらぬたゝかみおもひもしりぬ　くらきより山のはにくる月そ　信実朝臣

拾玉集又　いかはかりすぎしいのちにくらさむ　くらかりし山のしつかなる　慈鎮

拾遺雑賀　こしかたのほとはしらくもを思ひ　くらふ山をもへたてけり　よみ人しらず

新千雑下　人ことにさそひのこりて我袖に　くらふるかたにうつろふも　後一条入道前太政大臣

風雅恋四　人とはゝその思をもえぬる　くらきよりそらのくものいろ　永福門院

同恋上　わかれゆく年のをはりにおもひます　くらきよりくらき道に　中務

壬生二春上　人をまつ風をさそひて我袖に　くらふの山に咲にけるかな

古今秋上　秋の夜の月のひかりしあかけれは　くらふの山もこえぬへら也　在原元方

新千物名　そらの雲はれかゝるをまちかねて　くらさきにはかにもさそふかな　津守国助

新続古今　月の入る方の山をよそにして　くらきより海よりこゆる月　清輔朝臣

千載釈教　鷲の山月を入ぬと見る人そ　くらきにまよふもとなりけり　円位法師

新拾釈教　ありしよをおもひ出ては　くらきよりくらきみちにそ　入道二品親王

拾玉集一　ゆくすゑはいつの月の影をみん　くらきすみかをはなれてそゆく

千載釈教　日の光月の影をもさそひ出て　くらきよの夢のまよひをもさむ　蓮上法師

拾玉集五　風かよふよはの枕とふらくしてさそ　ふくるまもなくなかめつるかな　定家
拾遺員外下　まちかくるゝ梢よりもむすふまよ　ふくるまおそきやまのはの月
風雅雑上　さゝ浪や水のまの松のかけ　ふくるまゝに風の音のみ　藤原行信卿
続後撰秋下　さやかなる月のひかりにのみさす　ふけゆくまゝにくものいろは　選子内親王
新勅釈教　かきくもるけふのつかれのは　ふるきみちをもまよひつるかな　高辨上人
続後拾羇旅　あれはてゝ世をのかれてもをきて　ふけゆくまゝにすむ秋の月　後京極摂政前太政大臣
玉葉雑二　さ夜ふけて物のあはれのまさるよの　ふきにほふらむ嵐のよそに　永福門院
千載雑上　行かへてるもとゆくよしや　ふけゆく月のかけのあはれに　皇后宮大夫定子
玉葉恋四　まちわひて物おもふ人の心をや　ふかきよに来む夜もあらすとて　永福門院
古今恋一　あしひきの山下とよみゆく水の　ふかきおもひの色にいてゝ　よみ人しらす
新拾遺恋三　あちきなくおもひよはるよのすそに　ふかきおもひのあまりにてこそ　惟宗光吉朝臣
続後拾恋三　あかすても君とねぬよの夢にても　ふかきおもひのいろそ身にしむ　伏見院御製
拾遺恋五　とにかくにつらきは人のこゝろかな　ふかきうらみもあさくなるらん
月清集上　物おもふ人のこゝろのほとをしる　ふきくるかせにまつのおとも君
山家集下　すみなれし庵のむかしはいかならん　ふかくもいまはなりにけるかな
月清集下　ありしよにかはらぬ月のかけにても　ふるさとの秋のくさむら
拾玉集四　あはれとも露のなかなる身のほとを　ふるきみやこのあきのゆふかせ
壬生二下上　わすれぬはむかしの人のこゝろをそ　ふるさとの庭の秋かせ

新古恋三　あはれとてなにかかたらむよしもなし　ふかきおもひのそらにみちぬる　西行法師
月清集上　月見ばとちぎりしひとのおもかげ　ふかくもすめる月のかけかな
拾玉集三　世の中のうきにはたへぬこゝろかな　ふかきおもひのそこにしつめる
壬生二下上　行すゑてむかしをしのふ山さとも　ふかくもるかせのおと
続後拾遺雑　ありしよのむかしのことをおもふにも　ふかくみるのそらのはれま　前大納言為氏
新古雑中　やまさとにうきよをそむくひともなし　ふかくすむこそ昔なりけれ　西行法師
新千誹諧　さのみやはつらきこゝろをまちわひて　ふかくいつのよにかわすれん　小侍従
新古恋五　あふことのかたきおもひのまさるかな　ふかきこゝろはそてのぬれける　前中納言教盛母
拾玉集六　いつはりのなきよなりせはいかはかり　ふかきとしもおもはれぬへき
玉葉恋三　ゆめにてもひとをみるよのさむしろに　ふかきまことのかけをみるらん　後鳥羽院下野
詞花雑下　かくしつゝあはれとおもふあきのそら　ふかきよのつきのかけそさひしき　花山院御製
玉葉恋一　こひしさにたへぬこゝろのほとをしれ　ふかきこゝろのうちをしらすや　小侍従
拾玉集一　山ふかくすむはかりこそうれしけれ　ふかきおもひのうちとやは見ん
新続雑中　いはまもるむすふこゝろのうちにても　ふかきちかひのあとをたつねて　従二位家隆
山家集下　まことにはたれかはすまん岩井の水　ふかきやまのつきのかけかな
後拾恋五　あひみてはなかなかなれやこひしさの　ふかきおもひのそてをぬらさん　仁和寺二品法親王守覚
拾玉集七　月影をまちいつるよはの山のはに　ふかきなさけのおもひやるらん
新後拾恋四　みくさのうへにうきねの水　ふかきおもひの人のこゝろを　参議雅経

後拾撰帯　いつくとも所はさためぬ[illegible]のなかき　ふるさとのみならす秋の夜の月　相模

新勅秋上　こはまつうき雲もなく秋風よ　ふるさとこそあかぬ有明の月　右大臣

拾玉集五　君こそはすむ宿はあれ[illegible]月の影　ふるさとに[illegible]錦たつらん　慈鎮

風雅旅　旅ねとふ旅のやとりをさそひつゝ　ふるさと月とゆめや[illegible]　前大納言為家

新古今教　谷川のなかれは清くすみぬとも　ふるさと月の影は[illegible]　肥後

金葉雑上　まつとらに[illegible]やゆくと月影の　ふるさとにそ[illegible]　僧都頼基

同　うら山[illegible]ちるくいつくかの　ふるさとに[illegible]の月をみるらん　橘能元

拾遺物名　あをやきて山に入[illegible]我なれや　ふるさと[illegible]もあらし　よみ人しらす

山家集下　みをしりてうきになしむ[illegible]　ふるさと山さ[illegible]

拾玉集二　うき世にはひとのこゝろもかはるらん　ふるさとにふる[illegible]下水　よみ人しらす

後撰秋上　風さむみなく秋虫の[illegible]　ふるさとにしのふの露[illegible]　つらゆき

拾遺雑秋　世中はいつもかはらぬものなれは　ふるさとに[illegible]　閑院のみこ

後撰雑二　わかれゆく[illegible]とも[illegible]　ふるさと[illegible]の[illegible]

拾遺恋五　つれなくむかしの[illegible]　ふるさとの[illegible]

後拾恋三　[illegible]　ふるさとよ[illegible]　藤原清正

新古今　[illegible]恨人[illegible]　ふるさとはよつけて[illegible]　曽祢好忠

後拾雑秋　袖ぬらす[illegible]白露は　ふるさとにむし[illegible]秋[illegible]　藤原季宗

風雅春上　かへるさの[illegible]　ふるさとにうつす[illegible]　後光院入道前関白太政大臣

壬生二　冬上　冬の夜の[illegible]山のさとの　ふるさとに[illegible]有明の月

新後撰冬　[illegible]霜枯の　ふるさとは[illegible]白菊　右近中将師良

拾衣三　[illegible]　ふるさとは[illegible]

後古羇旅　旅ねする[illegible]　ふるさとに[illegible]月[illegible]　行念法師

新古今羇旅　今そしる[illegible]秋の[illegible]　ふるさとは[illegible]露の[illegible]　二条法印定為

新拾雑上　[illegible]　ふるさとに[illegible]秋の夜の月　雅成親王

後撰秋上　[illegible]　ふるさとに[illegible]秋の[illegible]　前中納言定家

後古秋下　[illegible]秋の露[illegible]　ふるさとを[illegible]　前大納言忠良

続後撰羇旅　[illegible]　ふるさと[illegible]　前右近大将實有

拾遺物名　[illegible]霞の[illegible]　ふるさとは[illegible]　忠岑

新後撰雑上　[illegible]の[illegible]　ふるさとは[illegible]　法印[illegible]蓮

玉葉秋上　[illegible]の雲[illegible]　ふるさとの[illegible]秋の[illegible]　従三位親子

同　[illegible]の下[illegible]　ふるさと[illegible]　源清[illegible]朝臣

壬生二　秋上　[illegible]の下[illegible]　ふるさとは[illegible]

新古恋一　[illegible]の[illegible]月　ふるさと[illegible]　法印浄弁

壬生二　秋中　秋風[illegible]　ふるさと[illegible]白露

新古恋三　[illegible]袖の[illegible]　ふるさと[illegible]　東方朝臣

拾遺愚草上　松島やをじまの浦によるしらなみ　くさに風霜枯て月ぞやどれる

新千恋四　いとせめて恋しき秋風のふくにつけても　くさの原露おかぬまもなかりけり　永福門院

新古今恋五　身をうしとおもへばあらぬ面影に　くさの原そよぐかぜにぞ[illegible]　よみ人しらず

風雅秋中　稲妻の光の程もしらぬまに　くさ葉の露も秋の色なる　藤原秀能

壬生二集上　いつしかと秋風ふきぬ宮城のゝ　くさの上にも松風ぞ吹く　馬内侍

後拾遺恋三　暁の露はまくらにおきけるを　くさ葉のうへとなに思ひけん　藤原範永

後拾遺雑上　飛ぶ鳥の露にしをるゝをみなへし　くさはまた秋もまたきに[illegible]　曽祢好忠

新千秋上　さよふけてむしの音さむき秋の庭　くさの葉ごとに結ぶ白露　従二位為教

新後拾遺秋下　霧はまだはれぬ夕の月影に　くさは秋まつ[illegible]　花山院内大臣

続後撰春中　片岡の朝の原の雪消えて　くさはみどりに萌え出でにけり　[illegible]

拾遺愚草外下　むかし誰まつのしづくにぬれぬらん　くさはみどりに月ぞこぼるゝ　後[illegible]

古今雑上　むかしは今も恋しきものを　くさ葉の露にあさむすぶらん　後人

新後古今羇旅　春とおもふ旅の枕に露おきて　くさもわかばの袖ぞ[illegible]　高慶法師

新続拾遺春　月影も霞のまにまにやどりけん　くさはそよ[illegible]　兼好長経

大和物語　わかれにし其の秋よりぞ今もなほ　くさまくら露のおきふし　伏見院新宰相

風雅秋中　秋風の吹き月みえて宿の雨の　くさにも露や宿の夕暮　藤原雅経

新古雑中　しらずして霜の上にやおきつらん　くさむすぶ古さとの月　[illegible]

壬生二集中　あはれにも[illegible]君がこゝろの　くさもやつれて秋ぞあはれと

玉葉雑二　たのまるゝ松の尾山の秋ぞなき　くさにこもれる山里の風　院御製

同秋上　うす霧のはるゝ朝けの庭みれば　くさにあまれる秋の白露　永福門院

新千雑中　わだつみの海のかざしに波ぞ立つ　くさ木も見えぬ奥の白波　清原元輔

後古今恋四　行とくも見るべき人を木にもあらで　くさ木もなびく人の心は　中務卿宗尊親王

同冬　入日さす夕かげをのべに見て　くさにかれ行く野辺の秋風　正三位知家

新後拾遺雑秋　若菜つむ野辺のかすみの袖の色　くさも若葉にみどりなり　権律師則祐

後撰恋三　我ならぬ人もあはれと言ふべきを　くさも木も枯るゝ恋する　監命婦

大和物語　あはれてふ人もあらばと思ふにも　くさのはつかに人はみえけり

拾玉集二　月影の下のこほりや消えぬらん　くさの上にぞ霜のおくらん

新千冬　さえて行く雪に枯れての野辺の原　くさとふる野の水の鶴雲　後二条院御製

拾遺愚草上　あき風のこゝろをそへて行く人の　くさとる野辺の夕暮の空　源兼長

後拾遺雑　うちはへて秋はさびしき夕暮れの　くさかれゆけばまつむしの音　後入道

後古今羇旅　さすらへて難波の浦の浮き寝かな　くさの枕の夢もみじかし　後人道

拾遺愚草中　山里は秋もあはれをしる人の　くさむすぶ野辺の[illegible]　[illegible]

拾遺哀傷　みな人の命を露にたとふれば　くさむらごとにおかぬ日ぞなき　[illegible]

新葉秋下　ゆく空に秋をとゞめて見る人の　くさむらごとに露ぞみだるゝ　二条為藤

古今秋上　秋の野にたつ霧そこに残りなし　くさむらごとに虫の声ぞなく　よみ人しらず

拾玉集一　時わかぬ人の宿のあたりにも　くさの庭にもあきはきにけり

風雅雑中　並へは猶なれてもさびしかりけり　さびしさにたへたる人の　前大僧正慈鎮

山家集下　なかむるもおなしみやまの雲をこそ　さひしさのほかにもきかぬ

千載夏　五月雨は空もひとつにたゆみなく　さひしさに堪ぬる人のこゝろさし　寂然法師

続千雑上　かくてしも世にふる身こそ哀なれ　さひしさはありしにまさるいほり　西行法師

後拾雑上　世中をうしと思ふも我ならて　さひしさのうちにぬるよの　前関白左大臣

拾遺愚草上　いかにしてなからみをまつ身なれは　さひしさよ友もなきなるこゝろに　前大納言為氏

新拾遺上　秋の夕雲よりおちよ月の　さひしさの庵ふかくやすらひて

壬生二集中　おもひ捨て浅茅か原の風の　さひしさもこゝろにしらぬ　前大納言為家

古今恋一　山里のかけなる雲にしられて　さひしさのまさるものから涙

新後冬　山里はかへりしかふ人まれに　さひしさにたへてもたえぬ　凡河内躬恒

花宴　うきは身を世にやそむくらむ　さひしさはこゝろのかけに

拾遺愚草下　くもかくれあはれに月をなかめて　さひしさに原のこと雁の鳴なん

新古秋上　心なき身にもあはれはしられけり　さひしさはいつも月にはかはらねと

月清集下　あすも月のすみなむ宿の夕暮　さひしさはまさるよりことなら　摂政太政大臣

新勅秋上　さまねく露はおもはて秋風の　さひしさはなほ秋の初風　西行法師

拾遺愚草上　世中をいとひしはてゝすまぬみ　さひしさに峯の雲や立らん

続拾雑上　絶はつる世は今そうらみ　さひしさは庵もとゝむる　兼好法師

続古今哀傷　誰とてもとまるへきにはあらねとも　さひしさはあかすなかめて　西行法師

壬生二集中　旅人もまよふ八重葎　草の庵もあはれなる　八条院高倉

若紫　たちとまり霧のまかきのすきうくは　草のとさしにさはりしもせし

後撰恋二　いかにせむ浦の浜千鳥　草のかけにこそ身をかへて　隆寛

拾玉集二　雑おもひやる山のおくの　草の庵にかよふ人もなき　寂蓮

後千雑中　山ふかくいかにすみける人の身に　草のいほりはあれなまし

拾遺愚草上　こゝろのおくを人もしらぬ　草の庵は　藻壁門院少将

風雅雑下　さよ更て人のとひこぬ　草のいほりもさすかなりけり

拾遺愚草　なきかけの人やしのひし　草のいほに枕ならへし　安嘉門院四条

後撰秋上　秋の露はしけきものから　草の庵のまたはあらしに　僧都實因

拾遺愚草上　人もとひ来ぬ山の　草の庵の雲やさなから　二条太皇太后宮大弐

新勅雑四　いまさらにそのよすかをも　草のいほにいたく霧ふる　大弐

後千雑上　人なき宿にたえて　草の庵りは秋も露けし　前大僧正道玄

新千秋下　かゝる山家のさひしさ　草の庵は雨のふりぬる　後二条前内大臣

後古秋上　たえて絶たる海の綱にて　草の庵にかゝる露そ　前中納言定家

後撰秋上　秋風の吹へきかひなき　草の庵のうへにをく露に　ちかく

拾玉集又　あはれなる世をさそふ　草の庵はひとりねてこそ　隆寛

後撰雑　さむしろのころもの衣かたしき　草のいほにもさすかに山の　大僧正慈恵

金葉雑上　年ふれは宿のこすゑも雲　草の庵のたえまにも見ゆ　藤原伊賢朝臣

後撰秋上　我[illegible]　[illegible]　[illegible]

新後拾遺羈旅　[illegible]旅[illegible]　[illegible]　後法性寺入道前関白太政大臣

明石　ひとりね[illegible]　[illegible]

玉葉旅　旅衣[illegible]　[illegible]　鎌倉右大臣

狭衣三　[illegible]　[illegible]

拾遺物名　[illegible]　[illegible]　藤原輔相

拾玉集七　秋[illegible]月[illegible]明[illegible]　[illegible]

続千秋下　露[illegible]秋[illegible]　[illegible]　今上御製

後拾遺羈旅　[illegible]　[illegible]　土御門内大臣

古今羈旅　[illegible]　[illegible]

新後拾遺秋冬　みやこ[illegible]　[illegible]　皇太后宮大夫俊成

後拾遺雑別　[illegible]　[illegible]　津守国助

拾遺別　[illegible]　[illegible]　いせ

拾遺賀外上　[illegible]　[illegible]

新千載羈旅　[illegible]　[illegible]　中務卿宗尊親王

新続古今羈旅　月も[illegible]　[illegible]　法印経賢

新後拾遺羈旅　[illegible]の月　普光園入道前関白左大臣

壬生二ノ上　[illegible]　[illegible]

月清集下　[illegible]野[illegible]山[illegible]　[illegible]

拾遺賀外秋　[illegible]　[illegible]　安藝

後拾遺秋上　女郎花[illegible]　[illegible]　馬内侍

新古今三　[illegible]　[illegible]　[illegible]御製

続千恋一　[illegible]　[illegible]　如覚法師

拾遺物名　[illegible]　[illegible]　二条院讃岐

玉葉雑三　[illegible]　[illegible]　後法性寺入道前関白太政大臣

同　[illegible]　[illegible]

拾玉集　[illegible]　[illegible]

拾遺賀外　[illegible]　[illegible]

長秋詠藻上　[illegible]　[illegible]

玉葉雑四　[illegible]　[illegible]　入道前太政大臣

拾遺恋三　[illegible]　[illegible]　人まろ

玉葉恋二　[illegible]　[illegible]　永福門院

同秋上　秋[illegible]　草木の[illegible]　新院御製

山家集下　[illegible]　[illegible]

後拾遺雑二　[illegible]　[illegible]　藤原[illegible]朝臣

玉葉秋上　[illegible]　草も木も[illegible]　藤原[illegible]朝臣

後拾遺釈教　あまねしと一味の雨にうるほへど　草も木も人も仏となるらむ　僧都源信

同羇旅　みやこにて雪まのはつかに出し　まだひきもせぬ若なつむらん　式部卿敦慶親王

續古今冬　おもふことありける身にも　くもの上にやすらふ月の　前大僧正公豪

拾玉集四　うれしさは八千世をかけてたのむ　くものうへのあはれの秋の世　慈鎮

後撰恋三　富士のねのもえつゝとはに思へとも　くものうへにきこえなりける　清慎公

大和物語　ふじの嶺のたえぬおもひをもえいづと　くものうへにきこゆなりけり

新拾恋一　なびきけり我かあはれ消えのこる　くものうへに雲ゐる雨の　小侍従

後撰恋四　あはれなるやの煙かなしも　くものうへにあらはれそめし　京極前関白家肥後

後拾遺恋三　うつり香のうすくなりゆく　くものうへにあらはれぬる　清原元輔

後撰恋五　あるかなき山のしたもえぬる　くものうへの煙なるらん　よみ人しらず

風雅雑下　あはれやさしかたの袖の　くものうへの煙なるらん　法印隆恵

須磨　うらのあまのまつむら恋の煙　くものうへにきこえぬる　よみ人しらず

槇柱　うきことはあはれもしほの浦　くものうへにとゞまる　よみ人しらず

拾遺哀傷　さしてゆく山の端もみな　くもる煙やさえぬよりも　よみ人しらず

新古恋二　いつはりもなきふせんの風に　くもりけりあはれの浦の　後鳥羽院御製

壬生二下　あはれなる恨もなき海辺の　くもりてもえぬ神のなかに　よみ人しらず

後撰恋六　中々にあらぬものゆゑ恋ひわたる　くもちかきにもあけぬ　よみ人しらず

拾遺雑恋　むかしの雲あらそふ　くもちかきにくらして此里　同

後古恋四　恋ひわびぬかたみにたのむ　くもゐのよそにけふもへだつる　源当時朝臣

拾遺恋四　つれなさの身をはるかにたのむ　くもゐはるかに人もまた　よみ人しらず

千載雑上　くもりなきあまつそらの月　くもゐのうへにすみわたる　大納言師頼

拾遺神楽　いつはりもなきものをたのむ　くもゐにはさもあらばあれ　よみ人しらず

新後古雑　あさ氷とけぬる池の　くもりてもすめる清水の水　前大納言為家

後拾恋一　いかにせんひとつよになき　くもてにもえぬ浅き心を　伏見院御製

壬生二上　涙川末はあまたの　くみてしる身こそ雨の　よみ人しらず

新勅雑四　志賀の浦の波も　くもゐのそらにしるきかな　よみ人しらず

月清集上　君がりとはるかに待ちし　くもゐのうへに月の通路　藤原景經

玉葉夜　五月まつ花のかをりに　くもゐの日に月夜のかげ　法如堂入道前摂政

同恋　秋たちてむかし人はる月の　くもゐのうへに光あり　よみ人しらず

山家集下　あはれなる名のみ残りて　くもゐの月の影のまてしもいとゞ　よみ人しらず

新拾雑　あさ霞のへにをかしき　くもゐのこゑにも鳴く声は　從二位為子

風雅夜　山陰や谷のみちの五月雨に　くもゐのまてる月を見る　中務卿宗良親王

新葉雑中　信濃路やこえてつゞく浅間山　くもはいづくのからにせぬ　大江親重

玉葉旅　みやこまでまだとほき道を　くもはるかに谷のつゝ路を　藤原家經朝臣

詞花雑下　かきくらし雪ふる冬の　くもりなき花の雪をふみ　前右京権大夫為成

新千雑上　消えやらぬ花の雪ふむ朝ぼらけ　くもはるかの花の色のみえ

続古今　姿り吹く煙ろのころ夕立の　うりハす紀ぬるともなかりて　正三位知家
新勅撰下　花ハみな霞のころにふりにしを　うりまいろつくともこむ山　後京極摂政前太政大臣
風雅雑上　霞よ深く夕日かすむ松が崎　うりにろあかつき山のはの松　院御方
拾玉集七　人めなき秋の野の秋萩のすゑや　うりまよふあかつきの雲の空
山家集　いつの世やはかなく見えて　うりまよふ深く秋の夜の月
風雅旅　岩ねこのかたつかたの雲まよふ　うり風のまてこまり材　道全法師
同雑中　明け渡る空も松の木の間より　うりまよふ霞の松の木　従二位家隆
新古秋上　立田山岩ねの上の松の葉に　うりふらとききて月影　源通光
拾遺愚草上　あたりまでそよ吹く山風露ちりて　うりふ行きてもちらる
続拾遺下　咲きふ花のあさなる人の袖　うりふ霞のちりみる山風　院弁内侍
山家集下　あくれぬ霞のかすみ入りて　うりふなごりにちるもの
夫木　きみがあさあかつきの空の月　うりふ吹く花のちりきぬ
新後拾夜　花よりも霞の袖ハちるらむとも　うりふそよくれぬ夕立の雲
風雅冬　けさ見れば雪のみ山も　うりふけにつつ志賀の浦まて　後宇多院御製
新後拾雑　夕暮の空の色をみて月傾せむ　うりふけるあまの縄　前大納言為兼
月清集上　七夕の秋の夜の空をみて　うりふきぬあまの浦風　太上天皇
同　あさくともしらぬ山のはの　うりふ子すみ時ふくれ
続拾冬　山風よ時雨やふく夜ぬらん　うりふ紅葉のぬれたる月　順徳院御製

月清集上　雪乃夜の光もあかず嵐乃月　うりみそらのはるかの里
拾遺愚草　心のつくろひもえもかれむ人　うりまつ風ふる古葉ハ
拾玉集四　青柳乃糸によむなく来る風　うりあかりて夕霞のかれ
風雅雑上　時鳥鳴へきほとなりかの里　うりなかの夕の嵐の夕霞　前大納言為秀
続後撰下　けふ人岩はなさうきえそ　うりなみとも志賀の浦風　左近中将公衡
新拾遺下　梅花今さらなにをえかれ　うりふそふかつきの山　菅原朝元
拾玉集四　詠人乃心の色や頼ねらん　うりふやとろ月よあらそ
新千載羇旅　岩がねにたつ雁推柴おりきて　うりふやとろ中の雲の空　寂蓮法師
新千載下　雪よりも嵐の末まで尽て　うりふまつらね山さくられ　前大納言経継
風雅冬　うすずみまで晴やらぬ頼めの　うりふまつ雪のたつ山　嘉安門院
壬生二百中　甚とは見ぬ雲のこすみ白妙の　うりふ清みてみやの松原
新勅撰上　立まよふ松の梢よさてこそ　うりふ清みてみやの世　関白左大臣
拾玉集四　あはれ秋かはり秋の空　うりふへやらぬらん
続拾遺上　春霞立つさえ来れて行雁の　うりふあかつきの雲の空　入道親王尊快
新続古今下　花の種にはえ待て咲初く　うりふあかつき花のかた　後小松院御製
拾玉集四　山ちかくうちかた世の寒さ嵐　うりふあさきまの松風
新後拾夜　明来ぬ霞にさえて中やまの　うりふあまのむらさき家
拾遺愚草下　花にかなる古葉やふるらん　うりふあまのきまよ雲の空　うちか尓

月清集上　吹風や空にしらるゝみよし山　うちふる波の花の白雲

続後撰恋　名にしおふかたのゝ山の花さかりや　うちふりくらす浦人の袖　前太政大臣

玉葉秋上　秋風のさむき韻気にきこえし　うちふきこゆる初雁の声　後二条院御製

新後拾恋　夢ぬれて出る月も涙にぞみぬ　うちふみね夢さめぬる夜比　権中納言為重

風雅秋下　こほりにけりな秋のひかり　うちふきこゆる秋のむら雨　徽安門院

続千冬　神無月吹や嵐の山ふかみ　うちふきくれて散る木葉かな　参議公明

風雅恋中　何となき身をたのみてあはぬ人の心　うちふひかりぬる夜もの憂き　永福門院

新続古秋下　雲をわけて細月うつる山の端に　うちふすまゆく初雁の声　進子内親王

新後恋下　木の下をさしわけ人やよし野山　うちとかるゝ花のをち葉ふかき　寂蓮法師

山家集　さらぬだに花に雲ふかき山風も　うちとはぬ花の色をこそ見む

新千恋下　まつ世のまがきさえ世に心も菊の　うちとまれとぞいふもの　弾正尹邦省親王

拾遺愚草上　君がなき月をしれば夜半の風に　うちとけてもかくる夜の月

新拾雑中　浪よりも夢のうちもあまの家に　うちとけて浪にまかせる　按察使公通

玉葉恋　数へてもよしや人まつ山の端に　うちとちてそうつる月影　前太政大臣

新拾雑上　山ざとに花のちるそ世の中とに　うちとちそ花のうきにもなき　院御製

続後拾恋　人の世のなかにむかしをしのぶ夕暮　うちとなりても忘れ給ひ　正三位知家

千載羈旅　わけ来しあとをいつまで人なく世に　うちとかれにかへる成らん　刑部卿範兼

拾遺愚草上　杉もすぎ松のみあらし積りても　うちとふけにふるあかしの浦かな

拾遺愚草上　さびしさは秋はいつもとも更にあらず　うちともみぢの月の夜のこゑ

拾玉集六　雪の中に去年より年の吉野山　うちとやがてさくらが花や　

山家集上　花とみえ嵐にまどふ峰の雪　うちとそ風のそらにかすむらし

拾玉集六　山ざくらちりかたになる花ざかり　うちとみつる様ともみゆる

壬生二中　かへりの風を代々てらす月の　うちともみえん白菊の花

千載夏　一声はさやかに鳴きてほとゝぎす　うちとそのかたそらにさかり　従三位頼政

新続古雑上　夜明やすく心にも雲の浮くは　うちとはかなき物はさらん　清原深養父

新古恋五　初雁のなくなる雲の上にも　うちとまれてこそいはれの名　前大納言忠良

同恋上　恋ひまどふ人のこゝろにさかえつゝ　うちとは涙もよしなきにこそ　よみ人しらず

拾遺愚草上　いつまでかくもりて乙女の姿風となりて　うちとそこそ袖の行衛の末　

風雅恋　秋風とかはらぬ夕に人の心　うちとまきまで絹の袖　式子内親王

後撰雑一　名もしらぬ天津乙女と成ぬるか　うちとそあはん人をもめぐらし　菅原滋包女

壬生二上　とりどりにあかぬ山ざとの花の色　うちとそ花ちかくもなる　

新葉恋一　吹く世のならひとぞ思ふ　うちとならむ夜のうらみかな　読人不知

続千恋上　わかれしくやまのしらぬ関をこえ　うちとのかはらぬ恋しさめん　前大納言為世

新古恋四　あふみさへ月を恋しとかへるさの　うちとまれてなきぬれにける　よみ人しらず

壬生二下　泳てもうきみぬ神は恋しさん　うちとまれぬ月をみてかへる月夜　

玉葉恋下　飛びかふ跡しも知らで　うちとあとなき夜の月かな　院御製

月清集上　郭公なのりすくるは清見かた　くもりもつきぬみかけ月影
拾遺員外下　さらぬたにさひしき山のあれはて　くもりもそめぬ入日のかけ
風雅夏　衣手にすゝしき風をさきたてゝ　くもりそめゆく夕立の空　後伏見院御製
後拾遺秋上　をしむともしらてやけふの月　くもりかゝらぬ秋の夜の月　前大納言公任
新続古賀上　いくとせか君か千世まて見る月　くもりなく老の波より　法印長舜
続拾遺神祇　天くたる神を日吉にまつるそ　くもりなき世をてらす哉　山階入道左大臣
玉葉恋四　なきことをいつはりなくて庭と見き　くもりなき月の秋の夜の月　従二位家隆
続古賀　照月のひかりは山に家居して　くもりなきよるの秋のいく秋　贈参議義忠
拾遺秋下　大かたのはれぬ心もまたしらぬやま　くもりなきよのあはれさ　うたふ
長秋詠藻中　うれしくもみちのしるへをしらせて　くもりなきくもをみるかな
続後撰賀　四方の海風しつかなる浪の上に　くもりなき月をまつるかな　後京極摂政太政大臣
拾遺愚草下　四方の空さえわたるなる月を世　くもりなき世の光をはてらす
月清集下　此里はゆふへの原の近くさへ　くもりなき月のかけのきはみ
続拾遺神祇　日吉とてこのみやはしらの光なれ　くもりなき光をそてにうつしなん　天台座主公豪
風雅賀　をさまれる御代そ久しき月のかけ　くもりなくてらすもことに　如願法師
壬生二下　引くらへてかゝる世に見る月影も　くもりやみえんとはしら月影
後撰恋四　わか恋は月のかたふくよりもはるかなる　くもりかゝらて山の端の宿　よみ人しらず
新葉恋上　わかそてにやとれるかけのさやけきも　くもりていつか見えし夜の月　権中納言経高

玉葉秋下　たえぬともいかてかもしをのかたみに　くもりてくらき秋の空かな　前中納言俊光
新拾遺神祇　榊葉の枝もかはらすをもへは　くもりなきみせてくもらぬ　春日詮宣
新古秋上　たのめてもつらき梅のかほるころ　くもりもそらぬ春の夜の月　藤原定家朝臣
新千冬　うつりゆく雲にあらしの声すなり　くもりもそらぬ時雨ふる夜か　摂津前守
拾遺員外上　さゆる夜は清き光の月なれや　くもりもそらぬけしきなる
壬生二上　向ふ水の流れはきよくうつるらん　くもりもやらぬ影の月
千載恋三　恋しさの時をわすれて夜の空に　くもりもあへぬ袖の月かな　藤原成家朝臣
続千冬　時雨ゆく空にしられぬ月影　くもりもあへぬときそ見えん　法皇御製
続後拾秋下　氷のうへにやとれる月もさむき　くもりなきよにことうちそへん　太宰大弐重家
千載雑上　さらぬたにひかりさやけきなかめて見る月の　くもりはかゝらしとそみゆる　仁和寺後入道法親王
続千夏　此里をかりぬと思ふ夕立の　くもりなく浪しまにかゝる風　衣笠前内大臣
壬生二下　いかにせんすまのうらはの夕暮の　くもりなかりそ秋の夜の月
続古恋二　あはぬ夜のおもひのほかにある　くもりはてぬとさへ見ん　前中納言定家
壬生二下　さえわたる月の光のさやけさに　くもりなき月のかけそひて
続古恋一　思ひねの涙のそこにすむ月の　くもりともみゆくもはれ　藻璧門院少将
新拾賀　かけきよき池の水にそ月もすむ　くもりなき御代をそ見えん　従二位行家
古今賀　わたつうみのかさしにさせるしろたへの　くもりなくてらす月を見る　典侍藤原因香朝臣
新拾秋下　あけ行かはの山のはかすみ　くもりなきあけ方の有明の月　後宇多院御製

詞花冬　いかなれはさえまさるらん冬の月　くもりとこれいかなる月のかけ　瞻西上人

新後拾遺四　うしとのみ浅くもそ秋の月　くもりなきよにかくれみえん　伴周清

新拾遺哀　なかき夜の寝覚のなかの夕立れ　くもりかくさぬ風そ吹ける　前大納言為定

金葉秋　かつらきや山よりいつる月かけは　くもりなき夜のそらにすみけれ　一宮紀伊

新葉雑上　うつりゆく方をは人の思ひて出　くもりなくつゝきて今朝の初雪　後醍醐天皇御製

続古今三　ほとゝきす月やさてもちるまし　くもりなきまにうちすきにけり　新陽明門院

新後拾遺四　雨はれてのちもなかめのまゝすかた　くもりなきよのみちにそありける　右近大将資康

新続古今上　あさ夜あさ海の波まてさえて　くもりはてゝちりはてゝゆく　後京極摂政太政大臣

拾玉集三　住吉の松の梢のなかれしも　くもりことなき暁のそら

拾遺愚草二　三津の浜てる日の影もさらなから　くもりはてたる風そ吹ける

風雅雑下　秋さむくきよき渚のたえ一つかた　くもりなき夜の月そのこれる　伏見院御製

新後拾遺四　浪にしる世もかはらぬ人そなき　くもりさへそらにかゝれる　よみ人しらす

新古今雑上　月もなくひとり深山の苔のうへに　くもりなき月のひかりのみそ　丹波忠守朝臣

新葉哀　風のおとにたえぬ秋をも知るて　くもりもなき人の涙かな　法印守遍

続後拾遺秋上　足曳の山のはちかく空すみて　くもりなきよるのつきの月　鴨長明

新千載秋上　足曳の山のはにかく空すみて　くもりもすかしの月　権大納言公宗

拾玉集三　よそにのみこそこゝろの月も　くもらぬ空にいつる月かけ　春宮大夫實夏

　くもるもたえぬ空とおもひける　後西園寺入道前太政大臣

拾遺愚草下　秋といへは月のかけちも吹すさむ　くもゐにすめる秋のこの山　賀茂氏久

新拾遺神祇　天の下のちよの神のまもりを　くもりなきよにてらすみかみの　権大納言義詮

月清集下　岩の雪もはらひて冬の白山　くもゐにかゝる雪の白山　津守国助

新拾遺下　おもひけむ神のちかひのまことに　くもりなくてらすみよの山　大江廣房

新千載上　海のをちに月さしのほる山のはに　くもりなくてゆく月のかけ　前大僧正義運

続千載雑　月まつを待ちともなき人の上に　くもりなきよるのあかつき山　紀淑文

新続古今上　咲にほふ一もとゆかり山の花　くもらぬかけのこゝろそ見る　皇太后宮大夫俊成

新千載哀傷　なき人のおもかけ忍ふかな　くもゐにかへる衣をそみん　宗尊親王

拾遺雑恋　あさちはらいさゝむら竹吹そよく　くもらぬかけにあらしふくらし　前大納言公経

拾玉集六　されはこそ岩ねの苔もおひにけり　くもゐのかけにきみそみるへき

新古今雑上　めくりあひて見しやそれとも分ぬまに　くもかくれにし夜半の月かな

続拾遺雑下　今日ことに君かいのちをすゑのむら　くもゐの月はくもらさりけり　後嵯峨院

新後拾遺恋　たのめつゝこぬよあまたに成にけり　くもりなき月をこそみれ　三條院女蔵人左近

続後拾遺恋　みちのくの忍ふもちすり誰ゆへに　くもりなきよのあり明の月　正三位季経

風雅雑下　ともしひのひかりもきえて世を思ふや　くもりなき夜の月の月　入道前太政大臣

新勅撰雑三　あさ夜ふかくまよふ心のありそうみ　くもかくれても月はかはらし

続夜四　ひとりぬる夜床にかよふ月かけに　くもかくれゆく鳴く雁の声

続後撰秋　秋霧に妻恋ひかねて鳴鹿の　くもかくれゆくかりかねの声　中納言家持

後撰雑下　かくてのみよふかあり明の月ならん　くもくしてよそにまよへる　よみ人しらず

古今雑上　大空をてりゆく月し清ければ　くもかくせどもひかりけなくに　あま敬信

拾玉集六　世の中の人の心のくもりなき　くもゐさびしき山の端の月

新拾遺　月み(?)ればおもひ(?)ぞいづる(?)月なれ　くもらぬそらのきくのこゑ　後鳥羽院御製

新続古今雑下　是も今は花の桜の時なれや　くもらぬ月もいかにてらさむ　皇太后宮大夫俊成女

新勅撰秋上　山のはにいでそめしより秋の月　くもより(?)わたるさやけき月影　左近中将基良

同雑四　嶺は高ねはそらの上(?)に吹く風の　くもよりしたにきこゆる(?)音　仁和寺二品法親王守覚

風雅秋上　山里は光(?)もかはる(?)木の葉ちるおひ(?)　くもよりおろす嵐(?)槙原の声　式子内親王

新千載秋下　湖(?)に(?)も露の底(?)をまるをと(?)移(?)て　くもまおちくるかげの下波　源基氏朝臣

続後拾遺秋上　こえはまよふかたな山さそふやまかぜ　くもよりおくる(?)かぜの荒　参議雅経

玉葉秋上　名されはいやとしつらんとしの　くもよりこぼれおつる(?)きり　光明峯寺入道前摂政左大臣

新後拾遺羇旅　足引の山の夜さむしてる(?)かな　くもよりくだる月(?)数(?)かぎる(?)　後山階前内大臣

風雅夕(?)　かの山にはゆふぐれしたたる(?)のかけ　くもよりおちかる稲妻の影　前大納言経顕

月清集上　その月山高くのぼりふる(?)風に　くもよりたちのぼる(?)しら雲

拾玉集七　ゆふ(?)かげ山月はあかつき(?)風ふかし(?)　くもよりたえてむら(?)雨(?)

同　大空にあまりゆくとかきとける(?)かな(?)　くもよりもみな(?)落ちかゝり

新葉雑上　咲やらぬ花とまつ(?)ちる(?)山の端は　くもゝふかくゆくへ(?)しらん　前大納言季遠(?)

後撰秋上　七夕のかしこく(?)いつしか(?)天河　くもまよりぬる(?)(?)風　よみ人しらず

玉葉雑下　棹さしてながれにうつる(?)影(?)　くもゐにはこぼれてみなせの山　後法性寺入道関白太政大臣

新千載秋下　萩の花風ふきまよふ(?)ひと(?)も(?)さ(?)ばかり(?)　くもらぬ月ゆくゑ(?)なくなる(?)　藤原敏行朝臣

山家集下　月をみて(?)かきくもる(?)しら(?)露にさ(?)　くもらで(?)いでゝ(?)はるかにまちまくら(?)

大和物語　清く(?)なるさ(?)ひかくわかれ(?)みちの(?)は　くもゐにこそ(?)まろうとのみ

千載賀　あまのはら(?)ふきしく(?)ちよ(?)もあかぬ(?)　くもきえて(?)わたる(?)月かげ(?)　刑部卿範兼

拾玉集七　月はなほ(?)さそふ(?)にしるべ(?)なき(?)夜半(?)　くもまよりのぞくときは世の(?)中(?)

拾遺愚草中　光(?)る(?)山路(?)かさ(?)ね(?)を(?)時雨(?)　くもまよるこゝろかよふ雲

壬生二品上　さひし(?)さ(?)の深(?)あかし(?)けし(?)に(?)　くもれこそぬれの(?)稲月(?)

新後拾遺雑上　かくとも(?)いふ(?)べき(?)世の月　くもれとやのちの(?)もり(?)にかけ(?)なり　法印能海

新千載冬　なか(?)ぞら(?)に(?)ふかき(?)ものかた(?)　くもれぬるかけのさえ(?)の空　平氏村

続千載冬　ありあけの月かくや(?)山のはをいでて　くもそかゝれる(?)嵐に(?)はげし(?)　前中納言定家

新葉秋下　葛城やかづらきやまの月の影(?)そて　くもそよそに(?)山の秋世　前左近中将光家

続後拾遺雑上　和田の原八重(?)のしほぢに(?)て　くもそたちそふゆく浪の(?)かり(?)　前参議雅孝

月清集上　九重の花のさかりはたちにけり　くもぞ雲井に(?)たちまさる(?)

山家集上　待わびし(?)なかばの月のかげ(?)　くもそくまなく照らす(?)らん

壬生二品上　ちりもみちきえて(?)なが(?)ひく　くもぞ秋を(?)ひかえ(?)

新続古今秋上　天河やよひ(?)紅葉を(?)ながら　くもやすくしらぬ(?)里合の空　安嘉門院四条

伊勢物語　君があたりみつゝをゝらん生駒山　くもなかくしそ雨はふるとも

新古恋五　君かあたりみつゝををらん生駒山　くもなかくしそあめはふるとも　よみ人しらす

山家集上　秋の夜の月や[illegible]　くもかゝらす[illegible]

壬生二下中　[illegible]月影　くもまよふ[illegible]

拾玉集七　我ならぬ人も[illegible]　くもの[illegible]

新続古今　初瀬山花の上吹風見えて　くもにもにほふ有明の月　後京極摂政前太政大臣

続後撰　[illegible]　くもこそ[illegible]出る月かけ　後鳥羽院御製

山家集上　中々に心つくすもくるしきに　くもらはかくれいりかたの月

拾遺愚草上　[illegible]月[illegible]別れて　くもらぬ[illegible]

壬生二下上　[illegible]　くもりなき秋の夜の月　藤原基光

金葉集上　[illegible]　くもりなき[illegible]月

拾玉集二　[illegible]　くもりなき[illegible]

新千神祇　[illegible]我心　くもりなき[illegible]　普光園入道前関白太政大臣

新千賀　[illegible]山の[illegible]　くもりなき[illegible]　後光院入道前関白太政大臣

風雅賀　[illegible]山の秋の月　くもりなき君か[illegible]　前大納言隆定

新後拾神祇　我[illegible]　くもりなき[illegible]　中原師光朝臣

山家集下　[illegible]月[illegible]月は　くもりなき[illegible]

後拾神祇　[illegible]　くもりなき[illegible]　祝部成茂

新拾雑上　[illegible]月[illegible]　くもりなき[illegible]松風　光明院御製

新後拾秋下　[illegible]月影の　くもりなき[illegible]の松風　同

拾遺愚草上　[illegible]月[illegible]　くもりなき[illegible]

拾玉集五　君[illegible]月[illegible]　くもりなき[illegible]秋[illegible]

後拾遺雑三　[illegible]　くもりなき[illegible]　東三条院

続後撰神祇　神[illegible]山[illegible]この世を照らす　くもりなき[illegible]月影　前太政大臣

新千神祇　[illegible]神[illegible]　くもりなき[illegible]今[illegible]　前中納言隆長

新後拾　花の[illegible]山の[illegible]　くもりなき[illegible]雪と[illegible]　醍醐入道前太政大臣

新古賀　君か代の[illegible]山[illegible]　くもりなき[illegible]　六条右大臣

新拾秋上　君[illegible]　くもりなき月[illegible]　山階入道左大臣

風雅雑上　[illegible]の月[illegible]　くもりなき月[illegible]　祝部成国

山家集上　[illegible]　くもりなき月を[illegible]

新葉賀　君[illegible]秋[illegible]　くもりなき月の[illegible]　中宮

新千恋下　春[illegible]　くもりなき月の[illegible]　入道二品親王尊守

拾玉集五　[illegible]　くもりなき月[illegible]　長房

同七　[illegible]君[illegible]　くもりなき月[illegible]

月清集下　[illegible]　くもりなき月[illegible]

壬生二下上　月[illegible]　くもりなき上[illegible]

新古秋下　入日さす[illegible]山[illegible]　くもりなき[illegible]　曽祢好忠

玉葉雑下　さそひゆく花の心を風よは　くもりぬゆきそえむかしかな　前右大臣実教
壬生二百下　いつはりに年へぬるかな鏡山　くもりぬ流代のためしもみよ　公経公
拾玉集五　あきらけきうつの月よりしもあれや　くもりぬみよをさそ照らさん　内大臣
新拾神祇　あきつしま今も風そとおもふにも　くもりぬみよをさそ照らさん　前大僧正仁澄
続千神祇　君まもる御神も日吉の影そとて　くもりぬみよの行末の空　普光園入道前関白左大臣
新拾秋上　いつよりも光さやけき秋の月　くもりぬ氷ようつる白雲
月清集上　春風や池の汀の桜さくみゆる　くもりぬひかりの影そすむ　後京極摂政
玉葉神祇　男山峯よりいつる月影も　くもりぬれともさりけり　前大僧正覚恵
続千釈教　和らくる光をみてもあはれ月の　くもりてあけぬ秋のよの月　平師季
金葉秋　見るまゝに山ひかりさして出るより　くもりてみをそ明ぬ空
拾玉集七　月の空あふる風なき初かすみ　くもりてる世を今すゝむる
続千羇旅　見る人もなきにそうつる旅の都の空　くもりにはこゝろそつけ　馬内侍
続古雑中　世をてらす月日ひかりもしるへは　くもりとおもふ心そつけ　入道前太政大臣
続千神祇　さらりとも照る日吉も影むかし　くもりなきを出けるかな　前大僧正慈鎮
新後神祇　すゝや神も光さやけき　くもりてし世秋の月　太上天皇
新後拾春上　天津空霞そたつくらん　くもりゆく心ちそ見えん　前大納言為定
同恋下　山さくら尾上の桜咲にけり　くもりなくにほふ春風　後普光園入道関白
続後拾春上　出る山ころにまかふ花の　くもりなくにほふ秋のよの月　藤原基任

続古雑上　いつはりのなきよとまたぬ契哉　くも井ちかくあふくもつまのかり　前大納言為家
続後拾春上　行末もなかくかはらぬたのしみ　くもゐなるとはなくてたえせし　伊勢大輔
後撰恋六　ちらやすき花のさかりの人も見よ　くもゐはるかにかへる　よみ人しらす
拾遺別　思ふにもおもはぬこゝろまさりけり　くも井ならはいかゝ　曽禰好忠
後撰秋下　秋風に霧たちわたる雁かねの　くも井もかすかに見えそ　よみ人しらす
同恋四　いつはりもいつかはと君をまつ事の　くもゐのよそに入りし南　同
新拾雑中　たくひなく身をしるよるの雨そ　くもゐの山の一影　月花門院
玉葉秋上　夜の西よひてたひまのまに見る　くもゐのさすかの松風　入道前太政大臣
続千恋下　けふしらぬ人のむかしの秋の月　くもゐのかけのさしはせ　従二位家隆
壬生二百上　もろ人の風をもちてさそふ松の　くも井のよるも名のる絶
続拾冬　あさきよのことはりもとめてすむ雪にて　くもゐのかゝる山となりなん　周防内侍
狭衣四　こちらかしこきの天の下のかみなれは　くもゐのよそにはしのひすゑ
明石　秋の夜の風つきせの錦とつこも　くもゐのなれ時雨ものかん
新拾恋下　あはれなる花の色も浮き世に　くもゐのかけもむかし月影　前大納言為家
続古恋上　君をみるまた天のかく山のはまに　くも井のかけのあかさて見えん　前中納言定家
新後雑中　いつしかて宮よ逢へしかへる　くも井にたつ秋もかくなん　前大納言良教
拾遺愚草上　春日山みねの松原吹く風の　くも井にかへる代の春
新千賀　君か代のはるかに世に風絶もなかれよ　くものうへなき露の秋色　道興法親王

拾遺恋四　世の人のきくもよしなしみまくまの　しものまへにもおもひぬる哉　天暦御製

新古神祇　わきかへる賀茂の河波のいかに　しものみやしろ神風の音　藤原雅経

新後秋上　此秋も老となりてはみたらしの水　しものまよひぬ里合のけ　前大納言為世

新後古雑中　夕日さす浅山の高根にかゝる尾上　しものふかくそむる松の一村　平常縁

山家集下　又月あるのとこよにかよふ郭公　しもおくよもすからなき通　後醍醐院御製

新後古雑上　ありしほや煙もおもひ一筋そ　しものよつくも浦の玉藻　中院入道一品

新葉雑上　忘すとこそかへりてはひとりさえ　しものまたさむき夜のしとね　尚侍藤原灌子

拾玉集二　我みきさきて吹風にさそはれて　しもおくまかくあさひの影　前参議雅有

後撰冬　きえぬはみたりはけしきぬるれと　しものかくはかりのよもなかれ　太宰大貳重家

玉葉雑一　年をへて冬にふりけるさをしか　しものふかきのゆふへさそき　元良親王

同賀　和歌の浦に年へてすみし葦田鶴の　しものふかきやかよふ歳も　兼輔

壬生二子下　鶴の鳴く民の家ゐもうつりてみん　しものふかきのうへもまつらん　後成寺入道前摂政太政大臣

後後拾恋二　秋風の身にしみにけむおもふとも　しものふりぬるあさかな　

古今恋二　人をおもふ心ひとりにあまねとそ　しものみにふるはかなしき　

玉葉恋四　冬のよにおきてぬる中にそらにふる　しものふかきにみちのくに　宗良親王

拾遺貞外　九重のみかきのきくのかくさりけり　しも井に雲のなかそらに月の影　

新葉雑上　都へとめくる也ゆきて秋もとくもなく　しものかれものあけかたの月　

詞花雑下　天の原ふりさけみれはくもゐふく風　しも井にをちの沖津白波　関白前太政大臣

千載雑上　ちかくともおほえぬ人の中そとも　しも井にあけぬるまゝのみちの　右近衛中将実定

新勅恋五　なかなかに月ふたたびとしらすともさ　しものふかきのうへにのこる雨　相模

玉葉恋　いつしかとゆくへもしらぬわかれの袂　しものそてにそ結ひつくる時　周防内侍

新古雑中　久かたの月のむかしをたつぬれは　しもの上に小笹の杣の原　藤原有家朝臣

玉葉冬　さむしとやたつ寝の月の影いとゝ　しも井にうつりて霜そ色さむき　前関白太政大臣

同雑四　霞立て見渡す山の秋そさひしき　しものふかきのよ小夜の一声　藤原清輔

後拾遺羇旅　さそ人やたえにし上の道をゆきて　しものふきあかる須磨の浦　良暹法師

金葉春　山さくらさきぬるよりはかそへこの　しも井にうつるかたの一葉　源俊頼朝臣

新古秋下　禁裡の花色もたゝちつらぬもの　しものふかみや夕日の山の風　權大納言公實

詞花春　春くれは心とはなのちるものを　しものふかきにたえぬかり　西行法師

新勅冬　まきの葉にさえてあるわけ夕暮の　しものおきこしきえぬ枕　正三位家隆

新葉冬　君をさへつきせぬ秋のまほろし　しものふかきに念仏の聲　後村上院御製

新葉賀　ゆくすゑもみちのくの山のつゝさしれ　しものふかきにこにはけるかな　

新拾賀　かゝる里のゆく末かけて吹風の　しものふかく万代のみち　

詞花秋　あきの夜の月よりのみ見えくれて　しものふかく思ひのたつ　花山院御製

新葉神祇　都には花のさかりもとちかへり　しものふかすめる月のうき　新待賢門院

後拾秋下　人よりもきよくすみけり九重の　しも井にすみのぼる月の影　慈道法親王

玉葉冬　焼もとさむき夜の床の上の　しものまよふ袖のうへ　大納言隆資

後拾雑上　浮よのこころくもり月とかきぬらん　ゝもみつからふ霧の衣　源兼氏朝臣
新古羇旅　都をそらちにおもひなからこえつ　ゝものとむかし行末にいらり　源形宣旨
新後恋上　おりきあれなるかなさるあるひつき　ゝものみにわか手に鍋にふと　西園寺入道前太政大臣
新拾羇旅　太山路を夕こえてふれて宿は　ゝものかみなみに今秋のかね　花園院御製
新後拾春下　さくらたちてゆくも花の名さる哉　ゝものちゝみのゆくさひ月　後西園寺入道前太政大臣
玉葉雑一　萬代を月ならむ行ならうくそん　ゝものとるにそ君かゆくすき　少将内侍
拾遺恋上　むらすすきう今んかもうらゆく　ゝものそちらく思かすゆき　大納言為氏
新千秋下　我門のわさ田かりふをこの一を　ゝも井とわからなからそ好む　後鳥羽院御製
続後撰秋中　冬の夜月影さそわるを風か　ゝものをわかる露の秋風　坂上是則
新拾秋下　いくよ里あるたちなる秋とに　ゝものをひらにふ風ふくらん
長秋詠藻上　としふれとも和らか風と思ひそむ　ゝも井とみなれさうさしもは　皇太后宮大夫俊成
新勅恋上　天の原よをあるもし行も思ふそ　ゝものうりくそ恋いふふれ
拾遺雑秋　吹風はちらの秋をしくへき風みれ　ゝものうりともこふみえは　忠見
新千恋四　恋の身のふにふかる宿も思ふかす　ゝものあちりとも今ひつみ　よみ人しらす
新古恋一　わか思ふ宿の色ゆくしみかふれ　ゝものあつりもおもひそん　忠義公
続撰恋三　山乃下にはゆふあかひのこさらん　ゝものあつりも衣と野辺ん　藤原基俊
後古夏　待あり春をいふらまて郭公　ゝものあちりもありぬなかりき　禖子内親王
新千賀　梅かえの花にうけき月かけそ　ゝものゝこちそ風をつけ紀　金光院入道前右大臣

同恋下　あらさりし秋の宿へくつろそうる　ゝもかみはつの花とみへき　後京極院
新葉雑上　思ふさや三代まつりくへてよいかに　ゝものかれ紀まなつからん哉　大納言光有
続後撰春中　つかへての君子もかつらきにむつ　ゝものかれ行まかすれせて　二條院讃岐
金葉恋　あらち紀とれ月のひかり宿りせん　ゝものあかれとちてそかほ　下野
玉葉春上　春くるよ河のこのねなきみて　ゝも井かくしけふへたるか　前中納言定家
拾遺恋上　いつしかと恋のそこをはさみへて　ゝも井のさとまいらかるく　後京極院
後拾冬　山おろのそこ月あみれ月さえさく　ゝも井のこゝまいらかるく人　冷泉太政大臣
新後古賀　ちとせてよれ松のよろひへ八重代　ゝもかれよるふかくあらん　後照院宮左大臣
月清集上　代々乃君秋乃宿へおくさせ　ゝものふ宿は萩のうち　後京極摂政前太政大臣
後千秋上　其乃夜の宮れひら乃ひかりの秋の　ゝものゝうちに照もけり火　源光行
後拾雑春　君を千とせにさしへてもかく雄　ゝものにたる花の白雪　皇太后宮大夫俊成
風雅冬　あとはりて天の岩戸もあけぬらん　ゝものゝまゝなおさそ戯る　文貞公
新葉冬　つかふそてまつるへきし九重に　ゝものれまふ乃雪れ冴る　大納言経任
拾遺哀上　恋くる風にてひかり絵ふかな　ゝものれ庭もまかとも
千載賀　我か世にかきてみなりの秋まて　ゝものれちら絵古の下ま　太政大臣内右大臣
玉葉恋上　さてそふ宿からるひのみかねん　ゝもぬのうち露をるは　入道前太政大臣
拾遺哀上　行かつり孫の宿つれ録をさらく　ゝもぬのうりをよそまみれ
新後古春上　さ枝みつ松の上まちりそて　ゝものれらめたちゆく人　前大納言経任

壬生二百首中　旅ねする秋は宮古をはなれきて　くもゐの雁の声をきくかな　贈従三位為子
新千秋下　ちりちりに行しもあれはたえぬらん　くもゐの雁の秋の別を　頓阿法師
新続古恋四　なにとさはむつまし(?)かりし人はなれ　くもゐの雁のひとつらは　従二位家隆
続後拾秋上　かつら山雨はれて秋を思ひしり　くもゐのよそに今やなくらん　前大納言実清
新葉雑上　かつてきく時雨とそ(?)かはるなり　くもゐの雁もこゑそほるらん　太宰大弐重家
千載恋上　かつてきくや乃(?)まつ山の櫻ちれ　くもゐのよそにたちかへるらん　周防内侍
新古冬　袖をとふ(?)あらし(?)は山の嵐より　くもゐのよそにしくれ(?)ゆく月　中務卿宗良親王
新葉恋四　思ふよりかゝるなみたの袖のうへに　くもゐの月の影そうつれる
狭衣三　見る人のまつ(?)なかに(?)そ(?)月をみる　くもゐのつらにうかふ(?)月かけ
拾玉集一　君か代の(?)みちをこそ思へ(?)心(?)は　くもゐの月のひかりそへなん
月清集上　きみのかけ(?)を(?)さしそ(?)ふる(?)秋の夜の月　くもゐの月はいつもかはらし
新古雑上　いつしかも袖よりもれ(?)て月をみる　くもゐに月はのほるらん　皇太后宮大夫俊成
新続古賀　君か代のいくちとせ(?)をしらせつゝ　くもゐの月の照さやけしも　僧正宋縁
玉葉雑一　所せみ(?)しき我世の猶の西の空を　くもゐの月にいかにみるらん　山階入道左大臣
新拾雑中　くもゐの山のもみち葉も我かたにちる秋の　くもゐの月やなかめ(?)らん　藤原高範
壬生二百首中　ちるもみちはかさしてもかへる(?)らん　くもゐの月に(?)里のすみか(?)も
新葉哀　思ひきや初音(?)なかりし春の夜の　くもゐの月に袖やしほれん(?)　春宮大夫師兼
壬生二百首上　かすみ(?)ふく風にさそはれて　くもゐの月にとはれそすみぬる

新拾秋下　ゆく秋もこよひかきりの月かけは　くもゐの月もみえすもそなき　前大納言為家
金葉恋上　西に行く月をしるべに(?)なにとか(?)ひ　くもゐの月も誰に見すらん　藤原親房卿
新古雑上　いつかは(?)すむ(?)かはらのなかに(?)いひし　くもゐの月のかけもなき夜に　皇太后宮大夫俊成
拾遺員外上　をりまた(?)かす(?)の月を(?)見てしかは(?)　くもゐの月もなれし夜のそら　従三位為子
壬生二百首中　秋風にさそはれわたる(?)露の玉(?)　くもゐの月の秋風の空
玉葉秋下　住なれし秋のよはさへ月(?)かけそ　くもゐの月もさやかにそ見き　権中納言定家
続千賀　千世まてとその天津(?)人のかさしとや　くもゐのそらに月もすみなん　後京極摂政良経
玉葉雑一　またこ(?)しと月にむかひて(?)ける(?)を　くもゐに我ところ(?)なる(?)か　藤原惟信朝臣
金葉雑上　山のはもまたかくれなる(?)月かけの　くもゐのよそに(?)われておもへ(?)ば　光太后
続千賀　さかへ行(?)君か千代(?)の光(?)かな(?)　くもゐのよそにかゝる白雲　信明朝臣
新勅雑四　むかしよりさらに(?)かへる(?)人の山　くもゐの空のきよき月影　中院入道一品
新葉雑下　いつもわかせん君かはこの山の　くもゐのうへにすめる月影　平貞時朝臣
新拾羇旅　旅衣朝(?)のこの山をこえゆきて　くもゐのよそにきえし雲かな　皇太后宮大夫俊成
新勅恋五　まくらの涙のかなしさをいはて　くもゐはるかに(?)たちのほるらん　前大納言実家
千載恋　おもひやるこゝろのそらは遠(?)けれど　くもゐのよそにわかれぬるかな　太上天皇
続拾秋上　しらせばや(?)ころも(?)うつ(?)はつかり(?)の　くもゐにかよふ(?)秋の夕暮(?)
壬生二百首中　いまはよの(?)明方の空のかなしさ(?)の　くもゐのよそに(?)きえぬらん
新千冬　くもり(?)なき(?)ころも(?)の雪の(?)深さ(?)を　くもゐのよそ(?)に(?)あり明の月　後宇多院御製

新続古今 旅 行末もなほさかしき山のかけ ゆふくれのこゝろあきらめ 円照法師
後古 夏 待わひる君をもまつ郭公 ゆふくれのこゝろ月かけくらん 月花門院
新後古 夏 みしかくも月ははやくて短夜の ゆふくれのかくるへきかな 権大僧都兼尊
後拾 恋下 ありつゝもわかれてたのましかこゝろ ゆふくれのふきかへしの風 前大納言為家
古今 夏 夏のよのふしかともまちあはせ ゆふくれのこゝろの月やとらん 紀友則
新千 秋下 かはらぬ秋も名残と月さそれ ゆふくれのそゝ虫そなく 後一条院御製
新後拾 雑上 夕暮のなほうらなる心をきかれ ゆふくれのそゝに誰ととふらん 従二位氏久
拾遺 恋 ありまたちてよそとをりかけ ゆふくれのもとのこゝろかな 永福門院少将
玉葉 秋上 あさきしも風も秋なる夕暮の ゆふくれのこゝろの袖のつゆ 順徳院御製
風雅 雑中 夕ちくく白山のあさまにおまは ゆふくれのことも西郡にて 後人不知
新葉 恋一 夕暮はまつとさしぬ人をこふのみ ゆふくれのけ初秋 藤原清輔朝臣
壬生二ノ下 秋風にむかへはいかにもみよかし ゆふくれの秋の山の端
後千 秋上 夕ちれは月をみても物思ひ ゆふくれの秋の山の端 藤原清輔朝臣
新古 恋二 あさましやさのみもなにかに袖まさは ゆふくれのゆふ風の衣 左京大夫通光
月清集上 物思ふ秋とあはれてはをりしに ゆふくれの萩の葉の風そ
壬生二ノ中 さりともと思ふ人や待つらん ゆふくれの萩のはのをち
月清集上 たのめこし人もこぬ夜の荻の葉は ゆふくれの秋の風の音
続撰 秋下 おもひかけぬ人のかくるゝよ ゆふくれの萩のはの露 よみ人しらす

新勅 夏 郭公まつとやあけしよかりけれ ゆふくれのなくねひとこゑ 前大僧正慈円
新後拾 春下 見わたせはあれはや桜の花さかり ゆふくれのなかき山の端 前大納言為家
後後拾 雑中 谷深き草の庵のさびしさは ゆふくれのとふ人もなき 土御門院御製
金葉 秋 ものおもふ人のこゝろやいかならん ゆふくれのなかむる秋の夜半の月 源俊頼朝臣
拾玉集 夏 みねの月かくりなは待つらむ ゆふくれの空にひとつ
金葉 恋 あはれなりひとりねてよもすからなき ゆふくれのつれなし
新後 冬 さむしろに雪ふる夜の ゆふくれのひとり花そ 従二位家隆
金葉 雑上 おもひやるはるかなる空のあはれ ゆふくれのひとしほのそ 藤原家経
新後拾 秋上 天津風のさそふ声こゝ ゆふくれのひとり月そ 前大納言為定
拾遺 恋 ひとりねのしきりにまさる ゆふくれのしのふ
新拾 恋 ゆきまよふ ゆふくれのこゝろ 前右大臣
後古 羇旅 たのみつゝ秋のたひねも ゆふくれの 左京大夫顕輔
同 恋四 天の川秋の七日をたのむ ゆふくれの月 太宰大弐有家
須磨 心ありてそこにうらむる ゆふくれの
風雅 恋二 なけかる月も ゆふくれの 後人不知
後古 春上 かへるさやこの山の ゆふくれのそなたの雲 太宰大弐有家
新後拾 雑秋 ゆふくれのまつとくみれは ゆふくれのそなたの秋の月は 前参議忠定
後拾 冬 木の葉ちる風のみならて ゆふくれのなかき時雨 式乾門院御匣

新続古今冬二 [illegible] [illegible] 前参議為嗣
新千載冬 山[illegible]の嵐の[illegible] [illegible] 藤原為嗣
拾遺恋三 [illegible] [illegible] 右近大将道嗣
風雅冬 いつくとも[illegible] [illegible] 従三位大弐[illegible]
千載恋 さ月[illegible] [illegible]
山家集上 秋の月[illegible] [illegible]
月清集上 山かはの谷の梅に[illegible] [illegible]
新続古今羇旅 [illegible] [illegible] 後宇多院御製
後拾遺冬 嵐[illegible] [illegible] 藤原[illegible]
長秋詠藻 [illegible]山[illegible] [illegible] 新院御製
後拾遺羇旅 [illegible] [illegible] 平忠盛朝臣
詞花雑上 [illegible]心[illegible] [illegible] 賀茂[illegible]
新勅撰冬 冬の夜[illegible] [illegible] 前関白太政大臣
後古今羇旅 [illegible]月[illegible] [illegible] [illegible]
新千載秋上 天の川月の[illegible] [illegible] 刑部卿[illegible]
新拾遺秋上 [illegible] [illegible] 権中納言為藤
後拾遺夏 銀河[illegible] [illegible]
山家集上 月[illegible]みて[illegible]海の[illegible] [illegible]

月清集上 [illegible] [illegible] 浄阿上人
新千載秋 [illegible] [illegible] 宗尊親王
新古今雑 山[illegible] [illegible] 相模
玉葉恋四 [illegible]秋の月[illegible] [illegible]
後撰恋二 [illegible] [illegible] 後鳥羽院御製
後拾遺冬 [illegible]月[illegible] [illegible] 太宰大弐重家
新千載秋上 [illegible]月[illegible] [illegible]
山家集下 [illegible]山[illegible] [illegible] 前大納言為[illegible]
新千載雑 [illegible]月の[illegible] [illegible] [illegible]
後撰哀傷 [illegible] [illegible] 源基氏朝臣
新千載秋上 [illegible] [illegible] 常盤井入道太政大臣
玉葉秋下 [illegible] [illegible] 蓮生法師
同秋下 [illegible] [illegible] 大江千里
古今雑下 [illegible] [illegible] 太政大臣
詞花雑上 [illegible]月[illegible] [illegible] 中務
新古今雑上 [illegible]の浦[illegible]秋[illegible] [illegible] 入道前太政大臣
後千載上 [illegible] [illegible] 藤原経臣
拾遺秋 [illegible]秋の月 [illegible]

長秋詠藻　のちりゐよらぬ桜をのみきは　雲井上人へつゝあるらかり　前権僧正教範
玉葉旅　あとたえし山のまを過やらて　雲のよそゆく旅の月かけ
拾遺員外上　今宵とて月はさやけさまさるよ　雲井上人へ知らしらせ
壬生二集上　ふる里へ行人しらぬ旅ねにも　雲井おもふる山のすまゐん　二条法親王覚助
玉葉雑三　百敷やうちのみつねにこひしくて　雲井のへたつる山は住うし　出羽弁
新古雑下　あしひきの人しれぬ身をうき世には　雲井やたつる山かけにぬ　よみ人しらす
後撰雑二　ゆきかよふ河の瀬ぬ音すりて　雲井や天の河瀬を渡るらき　権中院大納言
新続古雑下　花さかり月さそふらん山の端に　雲井や天の河瀬をわたる　後法性寺入道前太政大臣下
新勅撰上　夕暮の空は桜もちりさかて　雲井渡るかさす嵐の風
壬生二集上　乙津風空吹あけてあまつ袖　雲井にしきに秋はきぬらり　同六下
新勅撰秋上　きこえさせくるありへ夜はすまて　雲井にしきを秋しらす
狭衣四　かせこそ今はみ世の御の　雲井にかゝるをそ見ゆる　よそにくらへん
古今墨滅　秋風にたなひく雲も月影　雲井にかへる雁のこゑ　按察使公通
玉葉秋下　逢ことのとこ世にかへる雁鳴て　雲井は夜は秋風そ吹
月清集上　七夕のあまの夜ふかきわかれ路を　雲井は衣はる秋風の吹　
拾玉集六　夏ころもおもふくさもかけて　雲井に衣をきかへる月影
同　天川かよふの波の秋のゆり　雲井衣ほすや立そ秋
拾遺愚草下

壬生二集上　ぬれてほす月のはしみぬれり垣　雲井ついても雲井の袖をを　人丸
後拾秋下　山桜たつれぬ影をなかりける　雲井こそ見えて夫婦もかり今来　権中納言云雄
後撰秋上　あまの川霧たちわたるなかれかな　雲井の夜やそよめかん　津守国久
新後拾秋上　漕くふねのあひもかはらて　雲井つたひりとも見えわたる
新葉秋下　天河月の宿れる影みえて　雲井の衣もひかりぬらん　宗尊親王
拾遺員外下　夕海の雲井に浪の月なかし　雲井のあまの山のやまもち
壬生二集上　吉野山花は雲井にかへりけり　雲井あとにむかひたる山
古今墨滅　うきなからあはれふかきの月影に　雲井にむかふる花の月　前大納言為家
玉葉旅　岩かねにたつる雲もこえてゆく　雲井あそこの花の月　中務卿(?)
後拾雑上　ゑそむる白露かゝるなかりけり　雲井ある山の宿ちるかな　寂蓮法師
古今冬　冬なから空より花のちりくるは　雲井のあなたは春にやあるらん　清原深養父
風雅冬　法の庭ことにまさる秋に　雲井ある夜の花そちりなん　前中納言定家
月清集上　山深み花よりはなを尋ね来て　雲井あるにもまさる花　
新後拾冬　あまきる山の雪枯るゝ時に　雲井ゆきても雪の白雪
風雅冬　空さむみ雪はれやらぬ山風の　雲井ゆきさえ雲まちる　前中納言為相
拾遺愚草上　月きよみ空すみわたる夜はまきの　雲井まてあらはれて心ちゆる
後拾遺冬　天河月はさやかに影すみて　雲井みなそこにうつれる　従二位隆教
後撰秋中　我袖に露そおくなる天の川　雲井のしからみ波やこゆらん　よみ人しらす

風雅夜　雨そゝく小田のさなへ乃山本よ　ふもとおりかゝる松のむら声　院一条
拾玉集六　月みつゝ杉まのいほりにかへり　ふもとやとりて[illegible]初瀬の寺　左大将
新後拾秋下　山風は吹くる松にかゝる月影に　ふもとまた[illegible]をみる　惟宗光之朝臣
新拾秋下　野辺[illegible]　ふもとまた[illegible]月　寂蓮法師
拾玉集五　木のまより[illegible]　ふもとさへ[illegible]月[illegible]
玉葉冬　雪ふれハ山の[illegible]　ふもとまた[illegible]月の[illegible]　前大臣
新千夜　[illegible]山の[illegible]　ふもとの[illegible]の月　後照念院関白太政大臣
拾遺愚草下　[illegible]海の雪[illegible]　ふもと海[illegible]つり舟
続千冬　[illegible]山[illegible]　ふもとまよ[illegible]雪　平時有
同雑上　[illegible]の山乃[illegible]　ふもとまた[illegible]関の杉むら　平宗宣朝臣
拾玉集二　つれて[illegible]初雁の　ふもと[illegible]
拾遺員外　[illegible]　ふもと[illegible]
拾遺愚草中　[illegible]　ふもとの里[illegible]
風雅夜　郭公[illegible]夕附鳥　ふもとの[illegible]　権大納言公蔭
新続古夜　[illegible]　ふもとの[illegible]　入道二品親王尊[illegible]
新後拾羇旅　山の[illegible]　ふもとの月[illegible]　[illegible]
新後夜　[illegible]　ふもとの月[illegible]　源為氏朝臣
新古冬　世中よ[illegible]　ふもとの月の[illegible]　和泉式部

月清集下　[illegible]雪[illegible]　ふもとの月[illegible]
新古夜　[illegible]　ふもと[illegible]月の[illegible]　皇太后宮大夫俊成
同　[illegible]　ふもとの月[illegible]　白河院御製
続拾遺三　[illegible]　ふもとの月[illegible]　安嘉門院四条
拾遺愚草中　[illegible]　ふもと[illegible]の山[illegible]
新勅冬　[illegible]　ふもとの[illegible]の雪[illegible]　後京極摂政前太政大臣
拾遺愚草下　山[illegible]　ふもと[illegible]の月[illegible]
新後拾春下　[illegible]　ふもと[illegible]山[illegible]　光大臣
新古夜　[illegible]　ふもと[illegible]　伊勢大輔
続千夜　[illegible]　ふもと[illegible]　大江宗秀
風雅雑中　[illegible]　ふもと[illegible]の山　前中納言重資
新古四　[illegible]秋の[illegible]山　ふもと[illegible]　家隆朝臣
壬生二集下　[illegible]　ふもと[illegible]山風
月清集下　[illegible]　ふもと[illegible]の世
拾玉集七　[illegible]風[illegible]　ふもと[illegible]風
同又　[illegible]月[illegible]　ふもと[illegible]山風　隆寛
新後秋上　[illegible]秋の月　ふもと[illegible]　俊恵法師
金葉秋　月[illegible]　ふもと[illegible]風　大納言経信

新古秋上　月影のすゞしくうつる水の面に　よもすがらぬるゝ袂の露　大納言経信

後千冬　まくらそてあかすや嵐ふくらん　よもすがら冬の松の嵐よ　権中納言親房

同雑上　志賀の浦や遠き御津の月さへ　よもすがら立比良の山おろし　行観法師

拾遺恋三上　詠めあかし秋風に　よもすがら冬のなか月影

月清集下　旅人のそてを待へと縁しく　よもすがらへ辿りの山風は

新拾恋上　入あひの声を聞すゝめ　よもすがられぬの寝覚の山

新後羇旅　これからの山の下道ゆけるそ　よもすがら枕屋の匂　入道贈一品親王

風雅雑中　人こそしらね谷の戸にかける　よもすがらへ風かゝれの山　従二位行家

新後古秋上　七夕の名のなかに　よもすがら草合たる　前大僧正慈鎮

拾玉集七　もかゝる秋の月はるかなる　よもすがら夜半の梓山　前大納言為世

後千秋下　明石のうらに又月かけ　よもすがら涙をかけり

拾玉集七　暮ねしも月残みて行ゆん　よもすがら月の山の窓

新勅秋上　明石の浦も霞に　よもすがら夜の秋の月影　前大僧正道玄

同恋上　恋のみかなしく　よもすがら夜の山　前大僧正道玄

長秋詠藻　暮ぬるやう夕の雲　よもすがら秋のたもとに　後京極摂政

壬生二百首　四方の海風　よもすがら秋の月　前中納言

月清集上　都よりも月の嵐　よもすがら山寺

後拾恋　谷川の音をきゝて　よもすがら月のしるへの声　寂蓮法師

山家集下上　冬の月影は氷ら　よそはかりの波の音　

新後拾羇旅　八橋をわたる　よそにみえてこそ　播河院中納言

後撰恋一　打わたしまはにみとせ　よそにあはぬ　よるへ　[illegible]

長秋詠藻　八橋のまゝ　よそにしみる柳の

拾玉集一　波のあふれ　よそに梢しに　よもすがら

後古恋一　恋しさの三河の八橋　よそにのみ　よるぞ

金葉恋上　あれにし風の　よそにすく　さゝみ

拾玉集二　旅人のかさ三河の八橋　よそにての杜の　左京権

同又　たえてしもとは君にしか　よしあけの雲　左京権

新古恋上　みわたせは岩の桜咲　よしさらの霞にかけ　左大将中将義詮

新拾春上　山ざとの春の桜　よしさらに明ぬる　後九条内大臣

拾玉集四　花さけは風のうへ　よりさかひく桜　権大納言宗

風雅恋二　うらみけるを　よしなとつゝる　

拾遺恋五　あさりの恋　よりくるかも　鸂

壬生二百首上　時ふきそよ波　よもしくの秋風

風雅冬　風の音も寒空　よもひとものよりの　前中納言資

同夜　夏の日の夕影　よもひとの風ぞ凉しき　従二位為氏

拾遺自然下　あらしかくらん山の月　よもしとすみ秋風

続千載　嶺高き三上の月も しらぬかな　さりともと我に知らせし　入道二品親王性助
続古秋上　さえのぼる風吹く空に曇りなき　さりともとまちし月ともみえぬかな　僧正行意
新拾秋下　名にたかき秋のなかばも過ぬれば　さりともとまてば月にも　前参議定宗
新勅秋上　松の戸をさしも明けぬる山風に　さりかたくねぬ月にかゝるかな　正三位家隆
新後雑上　いつはりのなき世なりせば雲つらん　さりかたき山のはいづる月　入道前関白
新拾秋上　秋風に稲葉をわたる山のはに　さりかたく山の端いづる月　進子内親王
続拾夏　晴やらぬ日数をへても山のはに　さりかたき雨の空　前大納言家良
新続雑下　みちのくの雅のさとの人ならば　さりかたき物の昔はいかならむ　権中納言雅世
続後冬　ふりつもる雪の上にも月は　さりかたき霞のうちの雪　正三位為実
玉秋上　夜をこめて山より出る月ならば　さりともとかへる影ぞ宿りなき　前大納言為世卿女
新葉秋下　風わたる雲のけしきも秋なれば　さりともの秋のなごりの風　後村上院御製
続拾春　かぎりなき月の影をも見るかな　さりともとなれそめし月のあはれ　前大納言為家
王葉秋下　くれかゝる山のはしらむ日のかげに　さりともと山ちかくなる　
月清集下　さらぬだに秋のならひにしのぶる　さりともとみぬかたのこの月
壬生二品上　紅葉ちる秋のこのはをそめつらん　さりともとはまたすむ月の山　二条院讃岐
新拾羇旅　吉野山みねにのぼりてみまほしき　さりともと春にはなりぬ　法印定円
壬生二品上　神無月時雨もやらぬ山城の　さりともの秋の夜ながら　

続古雑中　くまなき月の影をみる　くもらぬ月をみる月の空　隆信
金葉秋　あまつ風秋のけしきを　さやけき月をみる月のかげ　大納言経信
山家集上　ちるもみぢ今日もかはらぬ　まだき月の夜ぞふけにける
拾玉集二　うかれける風のまにまに　さりともと秋の夜の月
同四　吉野山をみてもなほ　さりともとかへる雲の
玉葉雑一　秋風に誘はれてこそ　さりともと秋の夜の月　中務卿宗尊親王
長秋詠藻　風わたる秋の夜の月　さりともとわが秋の月
月清集上　月のかげかはらぬものを秋風

内閣文庫

国立公文書館
National Archives of Japan